
それぞれの楯と交差する思い

黒 猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それぞれの楯と交差する思い

【Nコード】

N0522P

【作者名】

黒猫

【あらすじ】

アイギスの誇る双楯の如月修史と真田設子はある資産家が暗殺されるため、護衛任務のため暁東市に赴く。

そこで彼らは朝霧海斗と出会い運命は歯車が動き出した

プロローグ（前書き）

恋する乙女と守護の楯×暁の護衛のクロスです。
ではどうぞ

ブローグ

「シールド9、シールド10、状況を報告しろ」

「こちらシールド9、付近に不審物などは見当たりません」

「こちらシールド10、ただいま護衛対象者と共に空港出入り口へと向かっています」

無線で自分達の状況を報告する。

「了解した。おそらく遠距離からの狙撃の可能性が高い。シールド9、引き続き周りの警戒を怠るな」

「了解」

「シールド10は狙撃があった場合、狙撃の方向を確認し全員に報告せよ」

「了解しました」

「よし、通信終わり。健闘を祈る」

無線の相手はそう言い無線がぎれた。

……護つてみせるさ、アイギスの名にかけて

プロローグ（後書き）

多分、他の作品からのキャラも乱入するかもしれませんが。（たぶんですから）

読んでくれた人は感想や希望、その他もろもろくれたら嬉しいです。
では次回お楽しみに！！

アイギスの双楯

空港の出入り口には道を開けようとする多くの警備員とそれ以上の何千人という人で溢れかえっていた。

今、空港には超大物の大スターが訪れるからだった。

ドアが開き、その大スターが現れた瞬間、待っていましたかと多くの人が声をあげシャッター音が鳴り響く。

出てきた女性は笑顔で手を振る。

彼女の名前はキャリー・ライア。

数々の映画でメインヒロインを演じている有名人だ。

今回は、日本で自分が出演している映画が公開されるので来日してきたのだ。

キャリーのファンが色紙とマジックペンを手にサインを求める。

キャリーは嫌な顔もせずサインを書いて渡す。

一見、何事も無く穏やかに見えるが事態は深刻だった。

なぜなら彼女は今、命を狙われているのだから……

今から2週間前、彼女に不審な手紙や電話が何度も届いた。

キャリーの来日が決まりその情報が全国に伝わるとその行動がどんどんエスカレートしていった。

そして来日の前日に一通の手紙が届くが内容は極めて危険なものだった

『君を殺して、自分も死ぬ』

その内容に来日をキャンセルしようとしたがキャリーは反対した。理由は自分を待っているファンをガツカリさせたくない、そして日本の観光名所を回りたいだった。

そんなことで無理やりに来日を決行した。

当然ながらキャリーの周りにはSPと女の子が1人……映画の子役

だろうか？

SP全員は周りを警戒している。

「ウーン、日本のファンは皆良い人ネ」

キャリーはファンの反応に喜んでいた。

周りを見渡すと1人の少年が目に残った。

見た目的には中々高校生あたりの中性的な顔だ。

一瞬目が合うが、すぐに子を逸らした。

それが可愛かったのかキャリーはその少年に近づいた。

「ハア〜イ」

声をかけられたことで肩をビクツと震わせた。

「あなたも私のファンかしら？」

「えっ？ ええ……まあ」

少年はオドオドとしている。

「日本人は皆内気ネ。もっと気楽にしないと」

そう言い余った色紙にサイン&キスマークを付け少年に渡す。

「ハイ、どうぞ」

「ど、どうも……」

少年がサインを受け取ろうとしたとき遙か遠くで何かが光った。

「ハア……ハア……」

彼女をスコープで見ている男は震えていた。

手には黒光りする鉄の物体……軍用スナイパーライフル、レミントンM700・M40。

静かにキャリアに対して標準を合わせる。

「だめだ……僕以外の男に近づくな……」

ブツブツと呪詛のように呟きながら指を引き金に乗せる。

「君を殺した後、僕も後から行くからね」

そして引き金を引いた瞬間、標的の前に何かが遮った。

バーーーーーン!!!!!!!!!!

一瞬の出来事だった。

サインを貰おうとした少年がいきなりキャリアの前に立ち塞がり手に持っていた鞆を掲げる。

その後、鞆から高い金属音が鳴りファンの声が消える。

「キャー!!!!!!」

キャリーは何が起きたか分からず悲鳴をあげ、その場に座り込んだ。

「狙撃だ！！ キャリーが狙撃されたぞ！！」

SPの『狙撃』の言葉にファンが大声を出して蜘蛛の子如く混乱する。

「あそこよ！！」

キャリーと共に来日してきた女の子が遠くを指さした。

SP達はその方向に対して、キャリーを護るように立ち塞がる。

「レミントンM700……弾丸は貫通性の高いフルメタルジャケット弾か。危ないところだった」

弾丸を防いだ少年は鞆に当たった弾をみて言う。

「こちら本部、犯人の無力化に成功した。ターゲットの状態を報告しろ」

無線がつながる。

「こちらシールド9、ターゲットに怪我なし。どうぞ」

「了解、よくやったシールド9、そしてシールド10。的確な判断だったぞ」

少年はキャリーの元に向かった。

「大丈夫ですか？ ミス・キャリー」

キャリアに手を差し伸べる。

「貴方は一体？」

手を取りながら目の前の少年に問いかける。

「依頼を受けたアイギスのガーディアンです」

「アイギスの？」

立ち上がったキャリアは少年を上下に見る。

「貴方みたいな子供が？」

その言葉に少年はぐらついた。

「こ、これでも成人男性なんですけどね……」

苦い顔をしながら少年Hは答えた。

「お疲れ様、修史」

声の方向を見ると、先ほど狙撃の方向を指さした少女が歩いてきた。
そして修史と呼ばれた少年の横に並ぶ。

「もしかしてあなたも？」

キャリアは少女に言った。

「はい、私もアイギスのガーディアンです」

そう言い一礼する。

まさかこの2人がアイギスのガーディアンとはキャリアーは驚いていた。

「それでは自分達はこれで……」

任務が終わった修史はそう言い帰ろうとしたが、キャリアーは修史の手をとった。

「何でしょうか？」

修史は止まりキャリアーを見る。

「助けてくれてありがとう」

キャリアーは頬を染めて修史に言った。

「いえ、貴女を護るのが仕事でしたから」

修史が当たり前のことを言うと、キャリアーは修史の腕に抱きついた。

「なっ、何をするんですかミス・キャリアー!？」

豊かな胸が当たり修史は動揺する。

「助けてくれたサービスよ」

キャリアーはそう言い、修史に寄り添う。

「やめて下さい！！こんな大勢の前で」

そう言い周りを見ると、キャリーのファンが嫉妬や羨望の眼差しで修史を見ている。

かなり居心地が悪い……

修史はキャリーの腕を振りほどこうとすると、腕の拘束が開放された。

逃げようと思った矢先に顔を優しく掴まれる。

目の前にはキャリー……嫌な予感……。

予感的中

「チュ~~~~~」

「~~~~~！¥。ん。！！！」

キスをされた。

その行為に大勢のファンから叫び声上がる。

当の修史は……

（なんでこうなった？！　なんかデジャビュを感じる……やばい、頭がクラクラしてきた）

さすがに感覚が麻痺してきたようだったがあることを思い出した。それはあの忌々しく笑う男の顔……。

（だめだっ！！　しっかりしろ如月修史！！　このままではまたバカにされる）

一気に意識を覚醒させキャリーと距離を取る。

キヤリーは名残惜しそうな表情をしていた。

「はあはあ……なんとか耐え切った」

どうやら前回の悪夢のような任務で多少ながら女性に耐性が付いたようだ。

ため息をついた修史は自分の後ろで強烈な殺気を感じた。

修史はおそろおそろ振り返ると、隣にいた少女が険悪な顔をしていた。

「ま、まで設子！！ 今のは不可抗力だ！！」

修史は設子という少女を説得するが、設子の表情は変わらない。そしてゆっくり一歩一歩、修史に近づいていく。

修史は蛇に睨まれた蛙のようにその場から動けなかった。

「……………カ」

目も前に来た設子はボソリと呟く。

「え、なに？」

修史は聞こえなかったらしく設子に聞き返す。
すると設子は手を振り上げた。

「つて、ちょ、まった~~~~！！！！」

「修史のバカー~~~~！！！！！！」

スパーンと渴いた音をたてて、ピンタを喰らった修史は横に吹っ飛

んだ。

「な、なぜ……」

修史はそう言い今度こそ意識を失った。

憐桜学園

side 修史

「だゝはっはっはっは。何度見ても笑えるゝ!!」

黒いサングラスにヒゲを生やした中年の男は画面を見て大爆笑する。

「「……………」」

それを見て我慢する俺と設子からは怒りや恥ずかしさなどのオーラが滲み出ていた。

「いやゝ修ちゃんは相変わらずモテるねえゝ。パパは嬉しいぞ!!」

男はハンカチで目元を押さえる。

「そんなに人の不幸が面白いですか!？」

「何を言ってるか!! そんなの面白いに決まってるだろ!! 人の不幸は蜜の味という言葉を知らんのか？」

その言葉に俺は肩を落とす。

(なんて人間だ……人間失格だよ!!！)

そう思い前の男を見る。

一応、自己紹介をしよう。

俺の名前は如月 修史。

警備会社『アイギス』の特殊要人護衛課に所属するエージェントでコールサインは「シールド9（ナイン）」。

先ほどの有名人などや業界の要人のガーディアンとして護るのが仕事だ。

そして隣にいるのは俺の相棒。

名前は真田まゐだ 設子せつこ、コールサインは「シールド10（テン）」。

俺とは違う組織『フランクス』の殺し屋として所属していたが、戦いを通してお互いの境遇や気持ちを分かち合い、組織を抜けてアイギスに入った。

今では俺の半身のような存在だ。

……そして俺達の前で笑っている中年の男。

名前は神崎かんさき 恭一郎きょういちろう。

おそらく偽名だと思われるが、通称「課長と呼んでいる。

元傭兵でありガーディアンだったが、今は一線をひいている。

俺と設子の上司で、悪いことに俺の父親代わりでもある。

「それにしても気持ちいいビンタだったんじゃないかい、修ちゃん？」

課長はそう言い俺を見る。

そう、俺の頬には設子のビンタで出来た紅葉がくつきりについていた。

「仕方ないよね、恋人がいるのに他の女にキスされるんじゃない怒りたくなるよね、せっちゃん？」

課長が設子に言う。

「いい加減にその呼び方は止めて頂けませんか？」

設子は苦い顔をして言う。

「なんで〜？ 修史だから修ちゃん、設子だからせつちゃんでもいいじゃないか」

そう言い課長はブーブー唸る。

「……………いい加減にしろよ？」

いきなり設子の口調が変わる。
設子の周りから殺気が溢れる。

（ヤバイ！ キレてるよ〜！！）

俺は冷や汗をかく。

コレが素の設子の口調だが、いつもはお淑やかで振舞っている。
だがストレスが溜まると一気に豹変してしまうのだ！！

このままじゃ俺もとばっちりを受けてしまう。

周りに助けを求めるが……………誰もいない。

この薄情者どもめ！！

「せつちゃんのケチケチケチケチケチケチ〜！！」

一方の課長は気にせずニダダをこねている。

「ハア……………好きにしろ」

鬱陶しくなったのか設子は諦めたようだ。
課長に至ってはご機嫌のようだ。

「さて、まあお遊びはここまでにして……」

課長はキリツと背筋を伸ばす。
「というか、仕事場で遊ぶなよ……」。

「よくやった修史、設子。クライアントも満足している。アイギスの双楯に恥じない結果だ」

自分がにやけるのがわかった。
やはり褒められるのは嬉しいが、

「でもねえ〜最後のアレはねえ〜」

またしても画面を見て笑う。

このジジイ、蒸し返してんじゃねえよ

「早速だが、次の任務だ」

課長が仕事の顔に戻る。

「修史、暁東市を知っているか？」

「暁東市？」

俺は首を傾げる。

「たしか大手企業や裕福な資産家が多数住居している街ですよね？」

設子は答える。

「ああ、日本で最も犯罪が少ない街と言われている。高等区には日本有数の資産家がいるんだが……」

課長は言葉を区切り続ける。

「ある情報によればその高等区に住む資産家のご令嬢の命が狙われている」

「どこの組織ですか？」

俺は課長に聞いた。

「まだ不明だ。だが他の組織のエージェントが阻止しようとしたが返り討ちにあい殺されている。かなり腕の立つ殺し屋だと思われる」

「そうですか……」

俺と設子は気を引き締める。

「そこでだ、お前達には憐桜学園に入学してもらう」

「「憐桜学園？」」

俺達は聞き返した。

「資産家のお嬢様とボディーガードを育成する学校だ。設子はお嬢様として、修史はボディーガードとして潜入してもらう。」

すると画面に1人の男性が映る。

「紹介しよう、憐桜学園校長のさっちゃんだ」

『……佐竹^{さたけ あきとし} 明敏^{あきとし}だ』

この馬鹿親父が……。

俺は心底そう思った。

『君達がアイギスの双楯か？』

「「はい!!」」

俺達は返事をする。

『……フム』

佐竹校長が俺達をじっと見る。

サングラスのせいで目の動きが分からないがこれだけは判った。
この人もこっちの世界のプロだということが。

『神埼……大丈夫なのか？ 見た目はまだ子供だぞ』

観察終わった佐竹は課長に言う。

「安心しろ佐竹。見た目はアレだが実力は跳び抜けている、問題は
ない」

『お前がそこまで言うなんてな』

佐竹は僅かに笑っている。

課長とは一体どういう関係なんだろう？

『さて、では2人には憐桜学園に入学してもらうことになる。護衛対象者は神埼に教えてあるので後で確認してくれ。登校してきたらまず私の部屋すなわち校長室に来てくれ。詳しい説明をしようと思う』

「「わかりました」」

『では明後日になるがよろしく頼む』

そう言い残し画面がきれた。

「これが護衛者の情報だ」

課長がファイルを投げ渡す。

「幸い、お前達はお嬢様としての心得を持っている。問題はないだろう」

「ちょっと待ってください」

俺は手を挙げる。

今とんでもない事言わなかったか？

「設子はともかく、俺にそんな心得は関係ないでしょ!？」

「えゝいいじゃないか、妙子」

塞がりつつあった心の傷が一気に開いた気がした。

「お前は1年間、お嬢様をしてきた。どこにお嫁に出しても問題はない。私的には修ちゃんもまた女装してくれればよかったんだけどね」

クロス……いつか絶対に殺す!!

「それじゃあ2人とも、明後日までにファイルに目を通してくれ。明後日から憐桜学園に入学だ、しっかりやれよ!」

「了解!!」

俺と設子は本部を後にした。
その後ろ姿を課長は見送った。

(情報にあつた襲撃者の戦闘情報……知っている武術だな。……調べてみる必要がありそうだな……)

課長は本部の奥へと足を進めた。

「護衛対象者は……3人か」

ファイルを見ながら呟く。

俺と設子は会議室でファイルを見ている。

「ええ、それも二階堂に倉屋敷、神埼とはね」

資料を見た設子はため息を出す。

課長からの資料を見た限りだとどの資産家も大物揃いだ。

「これだけ多いと少し厳しいな……」

学校にいる時間は警護できるが放課後は難しくなる。

「その心配はなさそうよ、修史」

設子は俺に言った。

「倉屋敷のボディガードをしているのはロボットらしいわ。えつと…… 錦織 侑祈ってやつみたい。あとお嬢様の神埼 萌は古武術の腕前が一流らしいわ。問題なのは二階堂の方ね」

「どうして？」

俺は設子に聞く。

「二階堂 麗華のボディガードが朝霧 海斗っていう男なんだけど成績が下から3番目ですって。これじゃあ速攻狙われるわ」

「それじゃあ、二階堂を少し重視した方がいいかもね」

「そうした方が無難かもしれないわ」

俺と設子はお互いに確認した。

「それにしても学校か…… 久しぶりだな」

「そうね、みんなは元気かしら？」

「どうだろ？ 雪乃様はいつまでも元気じゃないかな？」

「それを本人の前で言ってみたら？」

「冗談じゃない！！ そんなことしたら何をされるか……」

俺と設子はセント・テレジア学院のことを思い出して話し込んだ。
そして時間は過ぎていき、憐桜学園に向けて2人は歩き出した。

運命の齒車が今、動き出す……

憐桜学園（後書き）

次回は遂に海斗視点からの始まりです。
どうなっていくのか自分すら不明です（笑）
それではまた次回お楽しみに

転校生（前書き）

読んでくれた人、感想ありがとうww—^・ω・）/
皆さんの感想が小説を書く原動力になります！！
自分だけ騒いでしまいました（-。 - ;）
では本編どうぞ

転校生

うーん、なにわ探偵シリーズはいつ読んでも面白い。

オレは本を閉じて目を瞑る。

本はいい、読んだ人に感動を与えてくれるんだから……

「また本を読んでるの？ 海斗」

声をかけられて現実に引き戻された。

「人が思い耽っていたのに……」

目の前には制服を着込んだ少女がいた。

オレの名前は朝霧^{あさぎり}海斗^{かいと}。

隣桜学園2年のボディーガード訓練生、クールでイケメンの美男子だ。

そして目の前にいる少女は二階堂^{にかいどう}麗華^{れいか}。

チビで貧乳の……『バキッ！』……才色兼備の俺のプリンシパルの
お嬢様だ。

「あんた、今失礼なこと考えたでしょう？」

「憶測で人を殴るなよ……」

見事に決まった右ストレートが俺の顔面に入っていた。
まったく、国宝級の顔に傷が付いたらどうする気だ。

「海斗は若干顔にでるんだよ」

声の方向を見ると2人の男女がいた。

男の方は錦織侑祈。にしこうりゆうつき

倉屋敷重工が作った最新鋭のロボットだがどう見ても人間にしか見えない。

自分がロボットである自覚すらないが下手な人間より人間らしい気さくで面白いヤツだ。

「すぐに暴力だなんて、麗華は野蛮人ね」

麗華に対して挑発的なことを言ったもう1人は倉屋敷妙。くらやしきたえ

侑祈を作った倉屋敷重工の1人娘。

母親の亜希子さんは天才なのだが娘のコイツは才能が全くないかず、頭が非常に悪いおバカでドジでかわいそうな子だ。

「海斗はなに読んでるの？」

妙はオレの持っている本に目を向ける。

「なにわ探偵だ、結構面白いぞ」

持っている本を渡す。

妙は本を開くがすぐに閉じた。

「なによこれ」文字ばっかじゃない。頭が痛くなりそう……あんたバカなのによく本なんて読めるわね」

妙は頭を抱えながら俺に言う。

勉強を真面目にやっていないだけでバカではないのに、本物の大バカにバカと言われるとなんだかムカツク。

まあ、そんなことはどうでもいい。

「麗華、新しい本が読みたいから金くれ」

オレは麗華に向かって手をだす。

「あんたこの前あげたばつかでしょう？」

「全部本に使い、全部読んじまった」

「呆れるほどの読書家ね」

麗華はため息をつく。

するとドアが開き、1人の女性が現れた。

「おっはよー、みんな元気かな？」

笑顔満点で教卓の場所につく。

「朱美先生おはようございます！！」

侑祈はアイドルが来たみたいにはしゃいでいやる。

あの女は柊朱美、俺のクラスの担任だ。

美人教師で男子の人气も高いが俺はあまり好きにはなれない。

なぜなら、いつもオレだけに殺気をぶつけてくるからだ。

鋭い氷の刃のような殺気は中々いいが、年がら年中されるのはたまつたもんじゃない。

オレも罪深い男だぜ。

「今日はみんなにお知らせがあるわよー」

朱美は意味ありげに全員に言うが、大して面白くないことだろうと俺は思った。

「なんとこのクラスに転校生が来るわよ」

それを聞いた生徒からざわめきが始まる。

「なあ、麗華。そんなに騒ぐことなのか？」

オレは隣にいる麗華に聞いてみる。

「そうね、この学園で転校生が来ることは珍しいわ。新入生ならともかく転校となると編入試験が難しいから大半は落ちるわね」

そうかとオレは返事をした。

転校生か……どんな野郎だ？

オレは教室の扉の方を目で見る。

感じた気配の数は2つか……プリンシパルとそのボディガードかな。

そんなことを考えていると、「みんな静かに」と朱美の声で全員が静かになる。

「それじゃあ転校生に登場してもらうわね。2人とも入って来て」

朱美の声で教室のドアが開いた……………

side 修史

今、俺と設子は憐桜学園の校長室にいる。

転校早々に約束どおり呼ばれたからだ。

そして目の前には学園の校長が腰掛けている。

「改めて挨拶しよう、憐桜学園校長の佐竹明敏だ」

「如月修史です」

「真田設子です」

俺達は佐竹校長に敬礼する。

モニターで見るよりか体格はがっちりしており屈強な男性だ。

やはり黒いサングラスを着けており表情が読めない。

この人なりのポーカーフェイスなのかもしれない。

「まあ、楽したまえ2人とも」

俺達はそう言われ敬礼を解いた。

「早速で悪いが状況を説明する」

佐竹校長は引出しからファイルを取り出し俺達に渡す。

「学園外の付近に不審人物がいることは判っているんだが追跡をしようにも返り討ち又は見失っている。監視カメラも強化しているが当然ながら死角もあるゆえ油断ならない」

俺は資料を見ながら話を聞く。

それにしてもこの監視カメラの量は異常だな。
テレビジョンよりあるぞ……流石は資産家令嬢が通う学校だ。

「しかし……まあ、学園の中に1人だけその死角を通って外に抜け出すバカがいるがな」

「えっ、それって大丈夫なんですか？　もしその生徒が犯人の仲間だったら……」

俺は危険だと言おうとしたが手で制された。

「その心配はない。私が連れてきたヤツだからな。学園始まって以来の麒麟児だがそんなことを考えるようなヤツではない」

麒麟児か……どんな人なんだろう？

「話を戻すが君達には護衛対象するクラスに入ってもらふ。1人は3年なので無理だが出来る限りフォローはしよう」

佐竹校長の話が終わると同時に後ろのドアでノックがした。

「入りましたまえ」

ドアが開くと出てきたのは若い女教師だった。

「佐竹校長、なにか用でしょうか？」

そう言い俺達に目を向ける。

「朱美君、君のクラスに転入生だ。では2人とも挨拶を」

「初めまして、如月修史です」

「真田設子です」

「こちらこそ初めまして、担任をしています柊朱美です」

朱美はウィンクをしながら挨拶する。

「そろそろHRが始まる時間だ。後は朱美君に任せる」

佐竹校長はそう言い仕事に戻った。

俺達3人は校長室を出て教室に向かう。

「真田さんは前の学校はどこだったの？」

朱美先生は笑顔で設子に質問する。

「前はセント・テレジア女学院にいました」

「うそつ、テレジア女学院にいたの！？ それじゃあ超お嬢様じゃない」

「いえ、そんなことは……」

設子は頬を染めながら恥ずかしそうに答える。

うーん、いつ見てもこの猫かぶりには感心する。

このギャップの差にアイギスの皆も最初は驚いていたな……

「ところで如月君はどうなのかしら？」

色んなことを思い出していたら俺に話が回ってきた。
よし前日考えたマニユアル通りに進めていくか。

「自分は設子お嬢様の執事兼ボーダーガード見習いでしたね。さすがに女学院には入れなかったので放課後になるまではお屋敷で雑務をしていることが多いですね」

俺は嘘っぱちのことを朱美先生に言う。

女装して生活していたなんて言ったら俺の人生は文字通りゲームオ
の死
ーバーになってしまう。

そんなことは話したくもないし知られたくない。

真実を知っている設子は心の中で笑っているだろう（泣）。

そんなことを話している間に教室に到着した。

「それじゃあ私が呼ぶまでここで待っててね」

そう言い元気よく教室に入って行った。

そして俺と設子は2人つきりになる。

短い沈黙になったが設子が声を出す。

「さっきの話で、『自分は女装して女学院で生活しました』って
ていえばいいだろ？」

素の口調で設子はとんでもないことを言ってくる。

「心臓に悪い冗談はやめてくれよ、設子。そんなに俺を苦しめたい
か？」

「ふつ、悪かったな」

そう言うが反省の色が見えない。
こっちの麒麟児も世話するのが大変だ。

「2人とも入ってきて」

朱美先生の声が教室から聞こえた。

「行こうか、設子」

「ええ、修史」

お嬢様フェイスに戻った設子と俺は教室に入った。

教室に入るとクラスの生徒が俺達を見る。
なんだか緊張するな……そう思いながら教卓中央に立つ。

「それじゃあ自己紹介をお願い」

それじゃあ俺から行きますか

「初めまして、如月修史です。よろしくお願いします」

「真田設子です。よろしくお願いします」

俺達は軽く挨拶する。

挨拶が終わると拍手をされた。

周りを見るがそんなにすごい人はいないなあ……普通の学校と同じかな。

そう思っていると護衛対象を見つけた。

二階堂麗華と倉屋敷妙だ。

二階堂麗華はこちらをまじまじと観察しているみたいだが、倉屋敷の方はなんだか眠たそうな表情をしている。

本当にお嬢様なのか？と疑問に思う。

「それじゃあ2人は空いている席に着いて頂戴」

朱美先生の指示で空いている席を探す。

えーと……あつた、ちょうど二階堂麗華の後ろの席が2つ空いている。

佐竹校長が手配してくれたのかな？ これは感謝だ。

俺と設子は共に席に座る。

「初めまして、私は二階堂麗華よ。よろしくね真田さん」

前に座っていた麗華が設子に挨拶してきた。

「こちらこそよろしく、二階堂さん」

設子もにこやかに挨拶する。

「麗華でいいわよ、それと如月君もよろしく。ほらっ、あんたも挨拶しなさい」

麗華の隣にいた男性を引っ叩いて起こす。

「うるせえな、まったく……あゝトツテム・ポールだ。よろし『本
買ってあげないわよ』ってのは冗談で朝霧海斗だ、よろしく」

「よ、よろしく……」

俺は目の前の海斗という男を見る。

この男が二階堂のボディガードか、なんだか変なやつだな……こ
んなんで大丈夫なのか？

「なんだかお前って女つばいな、薫みたいだ」

俺の顔を見ていた海斗が言ってきた。

「女つばい！？　というか薫って誰？」

俺は海斗に聞き返そうとすると、「海斗それはどういう意味だ？」

と海斗の前に座っていた人物が振り返って言った。

見た感じは女つばいがどうやら男のようだ。

なんでだろう……この親近感は？

「なんだよ薫、本当のことじゃねーか」

海斗は薫という人に言う。

薫って名前なのか……名前まで女の子つばいだと俺は思った。

「まったく、騒いですまなかったな。私は南条薫だ、よろしく」
なんじょうかおる

握手を求められたのでそれに応じる。

うーん、制服が女物だったら間違いない女だと誤解されるな
目の前の南条を見て思う。

「ほらそこ、先生の話聞きなさい」

朱美先生の声で話は中断される。

「それじゃあ連絡ね。男子は昼休み後に校庭で組み手をする事に決まったので遅刻しないように、特に朝霧君は無断でサボらないように」

「なんだよ、それじゃあオレがいつもサボっているみたいじゃないか」

1人だけ注意された海斗が朱美先生に言う。

「そう言っても前回の組み手でサボったでしょう?」

「あんた……それ本当?」

サボったことを聞いた麗華が海斗を睨む。

「……………テヘッ」

「テヘッ……………じゃない!!」

ああ……………思いっきり殴られてるよ、可哀想に

「連絡は以上よ」

そう言い朱美先生は手を振りながら教室から出て行った。

午前の授業が終わって今は昼休み、即ち昼食の時間だ。

俺と設子と一緒に弁当（俺の手作り）を食べている。

やはりとっていいのか午前中の休み時間は転校生恒例の質問攻めをくらったが、テレジアよりは楽な方だった。

授業の方もテレジアの授業を受けていたおかげでなんとか乗り切った。

でも設子には勝てない。

周りを見てもみるが教室にはほとんど人がいない。

おそらく学食に行っただろう……

麗華と妙も学食に行くとか言っていたし、俺たちまで学食に行く必要はないだろう。

「修史」

「ん？ なんだい」

設子が俺に声をかけてきた。

「明日の昼食はサンドイッチが食べたい」

「……………別にいいけど」

大丈夫だと答えると設子は「そう」と言って窓の外を見る。僅かに笑っていたような気がしたが、気のせいだろう。

「それじゃあ設子、次は組み手だからまた後で」

お弁当を片付けながら設子に言う。

「修史は組み手どうするの？」

設子が言っているのは実力を出すか否かである。

確かに本気を出せば訓練生には後れをとらないだろう、だが逆に目立ってしまう。

目立ってしまったては行動が制限されてしまい、後々面倒になりそう
だ。

ここは無難にいくことにしよう。

「相手の実力を見て適当に終わらせるよ」

そう言い俺は校庭に向かった。

校庭に着いた俺は海斗たちを探した。

だが案外楽に見つけることが出来た。

海斗がいるところだけ騒がしかったからだ。

「おっ、修史じゃん。こっちこっち」

俺に気づいた侑祈が手招きする。

海斗、侑祈、薫の3人とクラスにいなかった男性がいる。

「侑祈、誰だこの生徒は？」

俺を見ながら侑祈に言う。

「今日転入してきた如月修史だよ」

「そうか、自分は宮川^{みやがわたかのり}尊徳だ」

「宮川……ボディーガード名門の宮川家の人ですか？」

「なんだ、家を知っているのか？」

「ええ、有名ですから」

俺は宮川に言う。

（資料では二階堂麗華の双子の妹、二階堂彩のボディーガードだったな。成績優秀で学年主席なのになんで麗華のボディーガードじゃないんだ？）

「如月、大丈夫か？」

声をかけられ意識を戻す。

「大丈夫です、すみません」

「そうか、ならいいが……」

そして宮川は海斗を見る。

「おいっ海斗、貴様はそんな実力で麗華お嬢様を護れると思ってい

るのか？」

「さあ？」

「さあ？　じゃないだろ貴様！！　もし麗華お嬢様に万が一のことがあつたら貴様を殺す！！」

尊徳は叫び、海斗はダルそう聞き流している。

「どうしたんですか…これ？」

2人を指差して近くにいた南条に聞いてみる。

「ああ、海斗が毎回組み手で成果を挙げられないので尊徳がそれを指摘していたんだ」

「そんなに海斗は弱いんですか？」

「3人やつて1回勝てるか不安なくらいだ」

それってすごく弱いんじゃないか……

宮川は海斗が言い争っている間に教官らしき人物がこちらに向かってきた。

「教官がきたな、尊徳に海斗。訓練が始まるぞ」

南条の声で尊徳は自分のクラスに行ってしまった。

「尊も毎回つるさいぜ」

海斗は背伸びしながらダルそうにしている。

「よし！！ 全員いるな。これより組み手に入る！！」

教官の声で全員（1名除く）が背筋を伸ばす。

「時間内に10人に決めを入れた者から抜けていけ。ただし時間内に10人に達しなかった者はペナルティーとして校庭50周だ！！」

校庭50周か、アイギスの訓練に比べたら泣いて喜ぶくらいの激甘だな……。

「近くのもの同士素早く組んでやるように、それでは始めっ！！！！」

side 海斗

面倒くさいな、なんで今日に限って組み手なんだよ。

授業なら隠れて本が読めるのに組み手じゃ本が読めん。（まあ、本気を出せば可能だが）

やっと9人倒したところかな？

侑祈も南条もだいぶ前にあがったし、人数も少なくなってきた。時間も少なくなってきたところだし、最後の1人はさっさと終わらして抜けるか。

「おっ」

丁度目の前に修史がいる。

向こうもこっちに気づいたみたいだ。

最後の相手はアイツでいいか、悪いな修史、尊い生贄になってくれ。

「修史、相手してもらうぜ」

「海斗か、別にいいよ。海斗を倒せば俺はあがりだ」

「奇遇だな、オレもお前を倒せばあがりだ」

そう言い2人は笑う。

さてと、早く小説が読みたいんだ、早く沈めるか。

「いくぞ」

「海斗こそ、抜けるのは俺だよ」

2人は静かに構え相手を見た。

転校生（後書き）

次回は海斗と修史の組み手です。

一体どうなることやら……

それではまた次回！！（＾－＾）ノシ

能ある鷹たちは爪を隠す（前書き）

更新です 壁――・――
どうぞお楽しみください

能ある鷹たちは爪を隠す

side 修史

「ふう、やつと9人終わったか」

俺は額の汗を拭って一息ついた。

組み手とか久しぶりだな、アイギスでは先輩（宗像）にボコボコされてたからな。

まあ、そのおかげで回避能力だけ上手くなったんだけど……

昔のことを思い出した俺だが今は訓練のことに集中しよう。

周りを見ると殆どの生徒は10人決めをして終わっているようだ。

（早く終わらせないと……おっ、海斗だ。まだ残ってたのか……組み手をするついでに実力を視ておこうかな）

海斗はこちらに近づいてくる。

「修史、相手してもらうぜ」

どうやら海斗も対戦相手を探していたようだ。

「海斗か、別にいいよ。海斗を倒せば俺はあがりだ」

そう言うのを海斗は笑った。

何か変なことを言ったかな？

「奇遇だな、オレもお前を倒せばあがりだ」

それを聞いた俺もなぜか笑ってしまった。
面白い偶然だと思った。

しかしこれは負けられないな。
時間内に終われなければ残りで訓練と先ほど聞いたのだ。
今日は設子と引越しの手伝いをする約束だ。
破れば……命は無い！！（色々と）

「いくぞ」

海斗は構える。

「海斗こそ、抜けるのは俺だよ」

そう言い俺も構えをとった。

side 教室

海斗や修史が組み手をしている間、麗華や設子などのお嬢様たちは
礼儀、作法の勉強をしていた。

茶道、華道などの芸道の授業だ。

当然ながら完璧超人である麗華はすぐにマスターしたが、おバカな
妙は全てダメ尽くだった。

設子は多少手間取ったが出来るようにはなった。

「なんであんなことやんなきやいけないのよ」

授業が終わり、休み時間に3人は麗華の机の周りで話していた。

「あんなのは出来て当たり前よ、妙。出来ないと将来恥を搔く事になるわよ。そうよね設子さん？」

「ええ、まあ……」

設子は苦笑しながら答える。

「大体あんたは習い事とかしていなかったの？」

麗華は机にもたれかかっている妙に言う。

「やってたわよ！！ でも……全部面倒になって……」

「三日坊主つてわけね」

やれやれといった感じで麗華はため息をつく。

「う、うるさいわね！ そう言う麗華はどうなの！……」

負けじと妙は麗華に突っかかる。

「私？ 私は習い事なんてやっていなかったわよ」

「嘘よ！ やってないでなんで出来るのよ！……」

「先生のやり方を見て聞いてやれば大抵出来るわよ。あんたは見ないし聞かないから出来ないのよ」

麗華の容赦の無い言葉が妙に刺さる。

「それに比べて設子さんは下手でもないけど出来る方よ。どこかで習っていたのかしら？」

授業で設子の腕前を見た麗華は設子に聞いてみる。

「前の学校……セント・テレジア学院で習っていましたから」

「テレジア学院って結構なお嬢様学校じゃない！ なるほど納得したわ」

「そんなにすごくありませんから」

設子は普通ですよと誤魔化す。

「ねえねえ、そのセント・テレジア学院ってそんなにすごい？」

おバカな妙は2人に聞く。

「あんた……テレジア学院も知らないの？ 呆れるくらいの世間知らずね」

「うっさいわね、別にいいでしょ」

麗華と妙は口喧嘩を始める。

（本当に仲が悪いんだか良いんだか）

設子はそう思い2人を鎮めようとしていた。

side 修史

俺と海斗はお互いに固まっている。

本来人は長時間じっとしていれば痺れを切らし動こうとする。

その行動が隙を生み、攻撃をする瞬間になる。

しかし今はどうだろう？

海斗には付け入る隙が全く見当たらない。

これが成績下位の實力か？

「来ないのか？ それじゃあこっちからいくぞ」

海斗がゆっくり近づいてくる。

近づいてきたからには仕方ない、こちらも迎撃させてもらおう。

「はっ！」

顎に目がけて一発、当たれば間違いなくグロッキーになる。

しかし海斗はそれを腕で防ぐ。

そしてガードしていない腕で俺の鳩尾に狙いを定める。

とっさに危険を感知した俺は後退して攻撃から回避して間合いをとる。

「案外やるじゃねえか、修史」

「そう言う海斗だって。本当に成績下位なのかい？」

「当たり前だろ。これが最下位の實力だ、尊なんかオレよりもっと強いぞ」

海斗は笑いながら答える。

これが最下位の實力か、よく言っぜ。

「そう言っ修史こそ結構強いんじゃないのか？」

「俺はそんなに強くないよ。強いて言っなら避けるのが上手いだけの臆病者さ」

「オレも同じモンかな。流石に麗華の蹴りは躲せないけどな」

そう言って再び近づいてくる。

こっとなったら一撃離脱の戦法でいこう。

「ふっ!!」

わき腹に一撃――

当たれば多少のダメージは与えられる。

「――っ」

俺の蹴りは海斗のわき腹に命中した。

（よし、これであとは間合いを……）

海斗から離れようとしたら足を掴まれる。

「なっ!!」

「掴まえたぜ？ 修史」

海斗は顔は笑っていた。

俺は海斗に足払いされ尻餅をつく。
そして目の前には海斗の拳がある。

「俺の勝ちだな」

「……はあ、俺の負けだね」

俺は力を抜いて脱力した。

海斗の手を借り立ち上がる。

「海斗はやっぱ強いんじゃないか？」

「今日は運がよかったんだよ。次は負けるって」

海斗は苦笑して言い放つ。

「それじゃあ、俺は抜けるからな。頑張れよ」

そう言い海斗は校舎の方に歩いて行く。

「うん、それじゃあ」

俺は海斗の背中を見る。

（朝霧海斗……成績は下から3番目、それなのに二階堂麗華のボディーガードに選ばれた。なにか特別な特技でもあるのか？ それ以前にあの身のこなし……調べてみるかな）

色々と調べる事が山積みだな。

「さてと、早く終わらせようかな。本気で時間に余裕がなくなってきたし」

俺は手ごろの生徒見つけるため駆け出した。

side 海斗

（はぁ、結構めんどかったぜ）

校舎に向かう時、オレは対戦した修史について考えていた。本気で相手にしていなかったが、あまり余裕がなかった。

「避けるのが上手いだけの臆病者ねえ」

修史はそう言っていたがオレは違和感があった。

証拠は修史にやられたわき腹の蹴り――

一見、修史はパワータイプには見えないが、アイツの場合は確実に人間の急所に狙いを定めていた。

わき腹急所――つまりろっ骨の部分にだ。

本来、ろっ骨は正面の衝撃には強いが、側面からの衝撃には滅法弱い。

もし大男に蹴りなど喰らえば、骨が折れ内臓に突き刺さっているだろう。

修史はパワーがない分、テクニック技術でオレに向かってきたようだ。

「にしてもさすがにイテエは」

蹴られた場所を見てみると青あざ出来ている。
ダメージを無視して突っ込んだ代償かな。

「如月修史か、結構面白そうなヤツが来たもんだぜ」

オレの心に潜む何かが疼いた。

「それより早いところ麗華に金もらわねえ」とな

スキップしながらオレは教室へと向かう。

「麗華、終わったぞ」

オレは教室に戻ると麗華と妙が睨みあっている。

それを遠巻きで見ている侑祈とたしか修史のプリンシパル……真田
設子だったっけかな？

そわそわとしていた。

「おい、侑祈どうしたんだこれは？」

「あつ、海斗やっと終わったか。それがさウチのと麗華お嬢様が口
喧嘩からドンドンヒートアップしまつて……」

「で、こうなつたわけか」

説明を聞いて再度、麗華たちを見る。

「あんた、私より大きいからって調子に乗ってるんじゃないわよ！
」

「ふんっ！ 小さいよりはマシよ。この貧乳！！」

「言わせておけばwwwww！！！！」

聞いている限り、酷く次元が低い戦いだ。
ここはオレが華麗に終止符を打ってやるか。

「おい、そのバカ2人！！」

『バカ』に反応したのか麗華と妙がオレに意識を集中させる。

「海斗……あんた私にバカって言ったわね？」

「そう言うあんたは私をより大バカじゃない！！」

2人の容赦が無い言葉がオレにぶつかる。
しかしこの程度でオレ、朝霧海斗は倒せないぜ！！

「お前達の口喧嘩よりかは何倍もマシだ。それにお前達……」

オレは言葉を区切り、遠くで見ている設子に視線を向ける。
麗華たちも釣られて視線を設子に向ける。
いきなり視線を向けられた設子は戸惑っていた。

「アレくらいのプロポーションが無いのに……ねえ？」

設子は言葉の意味を理解したのか赤面した。

麗華より身長があり、妙より胸が豊かだ。

あれこそが真のお嬢様だろう。

「ちよつとは自重したら……」

最後まで言おうとしたが、麗華たちからドス黒いオーラが放出される。

後ろから侑祈の『逃げる海斗!!』と聞こえるが足が動かない。
これは体験したこと無いプレシャーだ!!

「「海斗」」

2人の声がオレに届く。

もう冷や汗がだらだら出ている。

顔を上げた2人は鬼の形相だった

「「死ねっ!! 海斗!!!!」」

妙の顔面パンチは大した威力じゃなかったが問題は麗華の攻撃
見事にオレの息子に無慈悲の殺人キックが入る。

「ぐわああああ!!!!!!」

オレは床にうつ伏せになる。

まだ物足りないのか妙はオレの頭をを踏みつける。

「妙、もうそんな奴放つときでしょう。顔も見たくないわ」

そう言い麗華は教室から出て行き、妙も同じく出て行く。

「海斗オオオオ！！ 大丈夫か！？」

侑祈が駆け寄ってくる。

良い友人を持ったもんだぜ、涙が出る。

「ああ、オレの息子も無事だ」

まだ立ち上がれないため床に座る。
麗華のヤツ、酷いことをしやる。

「海斗のおかげで喧嘩は止まったけど、もっと他の方法は無かったのか？」

「あつたがこれにしようと決めた」

「なんで？」

「面白そうだったから」

「そんなことしてると生傷が絶えないぞ」

「別に平気さ。それより侑祈、妙が行っちゃったぞ。早く行ってやれ」

「ああ、１００円やるからこれでなんか飲めよ」

侑祈はそう言い、オレに金を渡して妙の後を追っていった。
そして教室にはオレと設子だけ――

「悪いな、変な事に付き合せちまって」

だいぶ回復したオレは立ち上がる。

「いえ、喧嘩が治まってよかったです」

設子は笑う。

しかしオレは再び違和感を感じた。

修史と同じ、何かを隠している様子――否、オレを観察している視線が若干混じっている。

カマしてみるか……

「修史ならグラウンドだぜ、もう少しで上がると思うけど……」

親切なふりをして設子に話しかける。

「そうですね、どうもありがとうございます。それでは私は校庭の方に行ってみるので」

設子はその言い、海斗に背を向ける。

そしてオレは行動にでる。

侑祈からもらった100円を設子に向かって軽く投げる。

ただ投げるだけではない、殺気を放ってだ――

一般人なら殺気に気づかないか、何かを感じるくらいだろう。

しかし設子は――

「――！！」

パシッと自分に向かってきた100円を掴んでしまった。
暗殺の仕事癖を出してしまったのだ。

設子はしまったと思ったがもう海斗に見られてしまっている。
設子はどうにか誤魔化そうする。

「一体何をするんですか海斗さん？」

冷静に設子は海斗に言い放つ。

「どんな反応するか試したかったからさ。それよりよく100円を取れたな」

口元を歪めてオレは言った。

「家訓で鍛えられていましたから。殺気交じりの稽古をしたことがありますので」

設子は平然とオレに言う

「なるほど」

あくまでもしらを切るつもりでいるらしい。
だとすればコイツは神埼と同類か？ それとも……

「そろそろよろしいですか？」

「ああ、悪かったな。変なことしちゃって」

「いえ……それでは」

そう言い設子は教室から出て行った。
出て行く際、机に100円が置いてある。

「…………ふっ」

いつの間にかオレは笑っていた。

如月修史に真田設子ねえ…………

オレが思うに普通な人間ではないのは明らか。
しかもオレを観察している視線を向けてくる。

「面白くなってきたな、やっぱり日常より非日常が面白い」

オレは机の100円を手麗華の後を追った

side 設子

失敗した

それが今自分に思える一言だった。

咄嗟に殺気に向けられ投げられた100円を掴んでしまった。

見ていた海斗にはあんなことを言っ誤魔化そうとしたが、おそらく私をまだ疑っているだろう。

「修史になんて言えばいいんだ……………」

ため息を吐きながら校庭に向かう。

校庭にはまだ数人を生徒が組み手をしている。

どこに修史がいるか探していると肩を叩かれた。

「待った？ 設子」

そこには修史がいた。

なんて言えいいだろう？

海斗に疑われた？ 殺気に反応してしまった？

言わなきゃいけないことが多すぎる。

「設子、どうしたの？ なにかあった？」

事情を知らない修史は心配そうに声をかけてくれる。

ここは正直に言ってしまうおう。

「修史、海斗のことで話があるんだけど」

「海斗のことで？ なにかわかったの？」

海斗のことと聞いて修史は反応する。

「待つて修史。ここではなんだから部屋で話しましょう」

「部屋で？ ここでは話しづらいこと？」

私は首を縦に振る。

修史も話の重要性に気がついたらしく了承してくれた。

「それじゃあ待つて、教室にもどって荷物を持つてくる」

「それなら大丈夫、ほら」

私は修史の鞆を渡す。

念のために持ってきてきてよかった。

「持ってきてくれたの？　ありがとう設子」

修史は鞆を受け取る。

「それじゃあ部屋に行こうか。今回の情報と今後の行動を話さない
と」

私も頷き佐竹校長が用意してくれた部屋に向かった。

side 修史

「それじゃあ設子は海斗に殺気をぶつけられて飛んできたコインを
掴んでしまったと」

「ええ、ごめんなさい。つい昔の癖が出てしまって……」

「仕方ないよ、染み付いた癖は中々治らないから」

俺と設子は部屋で今日の事について話し合っている。
まさか海斗がそんな行動に出るとは予想外だった。
なかなか性格の悪い人物だな。

「だとすると俺も疑われている可能性が出てくる」

「どうして？」

「組み手のときに海斗は隙が無くつてさ、少し本気を出しちゃったんだよ。結果は負けたけど設子に仕掛けたってことは俺に疑いを持つていたことになる」

俺が説明して設子は頷く。

「それじゃあ今後は……………」

「ああ、極力海斗に気づかれないように行動する必要がある」

俺は設子に言う。

こんなに面倒な仕事はあの仕事以来だよ。

『ピッピッピッピッピッピッ』

突然本部から連絡が入る。

早速応答に答える。

「こちらシールド9、どうぞ」

『私だ、シールド9。どうだうまくターゲットに近づけたか？』

出てきたのは課長だった。

「なんとか友好関係にはなりました」

『結構、問題などはあったか？』

「それがですね……」

『なんだあるのか？ いきなり正体がばれたとかじゃないだろうな？』

妙に勘が鋭いな、課長

「朝霧海斗は知っていますよね？」

『朝霧海斗？ 二階堂麗華のボディガードか。それがどうかしたか？』

「ええ、組み手の時に少し本気を出してしまって不審に思われたらしく、設子に殺気をぶつけてコインを投擲してきたんです」

『それで設子がそれをキャッチしてしまってお前達は疑われたと？』

「すみません」

設子は課長に頭を下げる。

『ふむ……流石あいつの息子ってところだな』

課長は何か呟いている。
顔は僅かに笑っている。

『修史、設子！！』

課長の声で俺たちは背筋を伸ばす。

『朝霧海斗には十分注意して監視を継続しろ。そして護衛対象の警護も忘れるなよ』

「了解しました!!」

『うむ、よろしい。それじゃあ以上通信終わりだ。……さて修ちゃん』

課長の口調が一気に柔らくなる。

『2人きりだからって羽目をはずしすぎるなよ』

「なっ!!」

その言葉に俺と設子は一気に赤面する。
なんてこと言いやがるこのくそ親父は!!

『私はまだこの歳でおいちゃんにはなりたくない!! だから修ちゃんしっかり……失せるこの馬鹿親父!!!!!!』

俺は本部との連絡を切る。

そして沈黙――

とっても居心地が悪い。

「そ、それじゃあ今日は休もうか」

「そ、そうね」

俺たちは各自の部屋に行くとする。

佐竹校長が用意してくれた部屋は3LDKの部屋、学生には十分すぎるほどだ。

荷物はアイギスのほうでやってくれた。

あとは明日の朝食くらいかな。

俺の部屋はアイギスでも使っていた部屋に似せたモノクロの部屋。
やっぱりこの部屋が落ち着く。

静かに目を瞑り寝ようとしたが

「なによいれ――！！！！！！！！」

「おっ！！」

設子の声で一氣に目が覚める。

そして設子の部屋に向かうと、設子が自分の部屋の前で凍っていた。

「どうしたんだ設子？」

俺は設子を揺する。

設子は自分の部屋を指差す。

俺は設子の部屋を見て呆氣にとられた。

「じつ、これは……！」

俺が見てしまったモノはしまい込んだ悪夢の記憶

天蓋付きのベッド、薔薇の絵柄のドレッサー。

かつての自分の部屋を思い出させる。

「これも課長の私物か？」

周りの家具を見て思う。
一体どんな趣味なんだ？

設子を見ると本部に連絡をしている。

『私だ』

「これはどういうことだ!!」

課長が出ると設子が怒鳴り声を上げる。
余程怒っているのか口調が変わっている。

『あつ、せつちゃん？ 気に入ってくれた？』

「気に入るわけないだろう!!」

設子は携帯を握り締める。

ああ、携帯が悲鳴をあげてるよ。

『いいじゃないか、せつちゃんはお嬢様なんだ。これくらい普通だろっ』

気にせずに課長は話す。

『用件はそれだけかな？ ならば通信を斬るぞ。明日の任務も頑張るように、それとそれ全部私物だから壊さないように』

「お、おい!!切れやがった」

設子は脱力した。

まあ、自分もそうだったしそうなるよな。

「それじゃあ設子、また明日」

俺は自分の部屋に戻る。

設子は静かにお休みといって扉を閉めた。

余談だが設子の部屋からはやはり課長の写真や、机に文字が刻まれていたらしい。

勿論設子はそれを全て排除したようだ。

今回の任務が終わったら課長は殺されるな……絶対に。

能ある鷹たちは爪を隠す（後書き）

感想ありがとうございます。

感想を見る度に元気が出てきます。

小説初心者ですがよろしく願います。

次回からは戦闘を入れようかと思っています。

刺客もだそうかな……

では！！（＾－＾）ノシ

暗躍する刺客と無情たる凶者（前書き）

明けましておめでとうございます。

毎日、布団で丸くなっている黒猫です。

今後ともこの駄作をよろしく願います。
それでは本編へどうぞ

暗躍する刺客と無情たる凶者

side 修史

朝日で俺は目を覚ます。

時間は午前5時30分。

朝ごはんとお弁当を作るためだ。

「ふあゝ、眠い」

顔を擦りながら洗面所に行き顔を洗う。

冷たい水が意識を覚醒させる。

「さて、今日はどうするかな？」

冷蔵庫に入っている食材を見て献立を考える。

あつ、そういえばサンドイッチ食べたいって設子は昨日言ってたな。そうと決まればサンドイッチの材料を出す。

「こんなもんでいいか」

玉子、キュウリ、トマト、ツナ缶…… xtc

これだけあれば足りるだろう。

「作るかな」

エプロンを着けて料理に入る。

玉子はゆで卵にしてフォークで細かく潰してマヨネーズで味をつける。

キュウリとトマトも適当な大きさに切ってパンにはさんで仕上げにツナをマヨネーズで味付け。

ラストは苺サンドイッチを作れば終わりだ。

設子は特に苺サンドイッチが大好きらしい。（まあ、女の子だしね）作ったサンドイッチをバスケットに入れて袋に包んでお弁当の出来上がり！！

「よしっ、終わりっ」と

時間を見ると6時30分、そろそろ設子も起きてくる時間だ。

朝食も作らないと。

朝食はシンプルにご飯と味噌汁に鮭の塩焼きだ。日本人はやっぱこれでしょう。

「おはよう、修史……」

「おはよう、設子」

眠り姫がお目覚めのようだ。

驚くことに設子は朝が苦手のようらしい。

若干寝ぼけているらしくウロウロと彷徨っている。

「設子、早く顔洗ってきなよ」

設子は首をコクンと動かし洗面所に行った。

さて、設子が来るまでに準備を終わらせるか。

箸や器の準備を着々を終わらせる。

「修史、朝ごはん」

顔を洗って意識を覚醒させた設子がやってきた。
俺は設子と自分の分のご飯と味噌汁をよそう。

「いただきます」

テレビを見ながら朝ごはんを食べる。

見るテレビは殆どニュースだ。

アイギスでは情報を得るためにニュースを見ることが習慣になっている。

内容は政治の横暴やら事件などで犯罪は絶えない。

「この暁東市の事件は少ないわね」

設子がテレビを見て言う。

そう、報道されている情報は治安が悪い地域が全般だ。
治安がしっかりしているこの町などは犯罪率は低い。

「でも、近くには犯罪者の巣がある」

暁東市にある爆弾とも言える地域——禁止区域

戸籍を持たず、犯罪を犯した者が逃げ延びると言われる場所。
世間ではあそこに住む者は人間とは見なされない。

犯罪者予備軍、人権を持たない存在など中傷的なことをほかのニュースでも報道されている。

「ひとつ壁の向こうではこんなにも世界が違うんだね……」

「そうね……」

同じ孤児でもありそれぞれ過酷な状況で生活してきた俺たちにとっ

てはあまり驚くことではなかったが、人間ではないなどとはあまりにも辛い現実だと思った。

「ご馳走様」

設子は食器を洗い場に運んでいく。
時間を見るとそろそろ登校の時間だ。
俺は急いで朝ごはんを食べた。

side 海斗

朝日を浴びてオレは目を覚ます。
光がオレを安心させる存在だ。

暗闇の中では寝れない……こればかりはさすがに直らないだろう。

「さて、それでお前は何をしている？」

目の前にはマジックペンを持ったメイドが1人。
しかも油性——何を考えているんだ？

「ちっ、もう少しで逝けメンになれたのに」

「そんな逝けメンはいやだ」

調子の乗っている目の前のメイドの名前はツキ。
まだガキみたいなヤツだがメイド長の肩書きを持っていやがる。

生意気で性格は超が付くくらいウザイ。

しかも自分で自称『メイドの鏡』なんてぼざいていたな。

「海斗、今私のことを馬鹿にしていましたね？」

しかも妙に勘が鋭い。

「ツキは今日も可愛いな、と思っていたただけだ」

「イヤ〜ンウレシイ。海斗は朝ごはん0・5倍にしてあげます」

「0・5倍って半分じゃねえか!!」

「おや？ 海斗のような脳みそスス力なら騙せると思っていたのに……失敗」

「もう出て行け、着替えるんだよ」

「海斗の着替えなんて見たら目が潰れますからね」

「それはオレの肉体が魅力的だからか？」

「そんなわけないでしょう。目が腐るの方です、この性犯罪者」

そう言いツキは部屋から出て行った。

朝から無駄な労力をしちまったぜ。

さっさと着替えてメシでも食いに行くか。

着替えて部屋を出ると尊がいた。

「海斗か、よく起きたじゃないか」

「朝は割りと寝起きがいいんでな」

2人揃って食堂に向かう。

食堂には他のメイドや執事が朝飯を食っていた。

二階堂の朝食は基本洋食でパンを食べる。

オレ的には米を食いたい気分だ。

「海斗、貴様はさつきから何を唸っている？」

隣に座っている尊が話しかけてくる。

「いや、毎日パンだと飽きてくるから偶には米を食いたいと思って
いた」

「朝飯を頂けているんだぞ、文句を言うな！」

「仕方ねえな（バリバリ、ムシヤムシヤ）」

「そつだぞ……って貴様！！ 僕のウイナーを食うな！！」

「気にすんなよ。ほらっ、ニンジンやるから」

「そんなものいらん！！ 返せっ！！」

「うるさいな……あつ、麗華」

「何!!」

尊がオレの視線の先を見る。

しかしそれはオレの嘘であり目的は……

「ゲツチュ♪（バリバリ、ムシヤムシヤ）」

「海斗……貴様、殺す!!!!!!」

フォークでオレを刺そうと突き出す。

オレも手持ちのフォークでガードする。

カチャカチャと金属音が鳴り響く。

「海斗に宮川様、食事の時はお静かに」

騒いでいたオレたちにツキが止めるという。

周りのメイドたちもこちらを見ている。

少しはしゃぎ過ぎたかな。

「もういい!! ご馳走様」

尊は席を立ち食堂から出て行ってしまった。

もちろんオレはその後ゆっくり朝飯を食って麗華と歩いて学園へ向かった。

今、俺と設子は商店街の道を歩いている。
学園からは約20分くらいの距離でこの商店街を通ったほうが早い。
まだ商店街は開いていないが開店の準備をしている店が多い。

「アイギスの連絡はなし……っ」と

携帯の画面を見て俺は呟く。

未だに学園の周りをうろつく不審者の情報はきていない。

「相手は少しは頭を使っているようね」

設子も情報が来ていないことに相手のことを分析していた。

「そうだね。でも油断は出来ないよ」

俺は設子に言った。

設子もそうねと頷いた。

「それじゃあ遅刻しないようにしようか」

そう言い俺は小走りして学園に向かった。

教室に入ると何人かのクラスメートがおはよう、と挨拶してくる。俺も同じく挨拶をして自分の席に向かう。

既に海斗たちは席に着いており佑祈と話していた。

「あつ、修史じゃん。おはよう」

俺に気づいた佑祈が声をかけてくる。

「おはよう佑祈」

俺は席に着いて鞆の中身を出す。

麗華お嬢様は妙お嬢様と話していた。

「ところで修史はどう思う?」

「えっ?」

突然、話を振られ佑祈の方に意識を向ける。

「彼女を作るなら家庭的な女の子を選ぶかどうかだよ」

なんだそりや……

海斗の方も呆れた様子で話に加わっていた。

「どうして家庭的な女の子なんだ?」

俺は佑祈に聞いてみたら、「彼女の手料理が食いたいに決まってるだろ」と返された。

実に納得できる理由だ。

「それで？修史はどうなんだ」

佑祈が真剣な表情で迫ってくる。

「そうだな・・・」

俺は横目で設子を見る。

俺は未だに設子の手料理を食べたことがない。

彼氏が彼女の手料理を食べたくないわけがない。

だから俺は――

「そうだな、彼女の手料理は食べてみたいな」

俺は佑祈に言う。

ちなみにその言葉に設子は反応して身体がビクッと動いた。
当の修史はその反応に気づいてはいない。

「やっぱり修史も俺と同じ意見だな」

佑祈は笑顔で俺の肩を叩く。

「それじゃあ、海斗は違うのか？」

俺は海斗の方を見る。

「そんなことで女を選ぶなんての」

海斗は面倒くさそうに言う。

「そんなこと言ってるとう海斗は一生独身のままだな」

侑祈が海斗のことをからかう。

至って普通の学園生活だった。

4時限目の授業が終わり今は昼休み、お弁当タイムだ。

侑祈と妙お嬢様と麗華お嬢様は食堂に行ってしまった。

海斗はなぜか3時限目から姿が見えない。

薫によると授業が面倒だからサボると言っていてどこかに行ってしまったらしい。

「あんなので麗華は大丈夫なんだろうかね？」

設子がサンドイッチをほお張りながら言う。

たしかに少し不真面目な性格なようだ。

俺もサンドイッチを食べながら思う。

「ピピッ、ピピッ、ピピッ、ピピッ」

突然、携帯が鳴る。

俺はすぐに内容を確認した。

『商店街の方面に不審人物を発見。エージェントで追跡したが返り討ちに合い負傷。至急向かってくれ』

俺は席を立つ。

設子も内容を確認したのか同じく席を立つ。

「設子行こう」

「ええ、修史」

俺たちは急いで商店街へ向かった。

side 海斗

「ああ、自由っていいな」

オレは商店街の本屋で立ち読みをしている。

学校の監視を抜けるなんてオレにとっては朝飯前さ。

「この本も中々いいな」

色々な小説を読み鑑賞に耽る。

本屋の店員に睨まれるがオレにとってはなんの痛みも無い。
黙々と本を漁り読んでいく。

「……あん？」

本を読んでいたオレに視線が当たる。
店員や周りにいる人の視線ではない。
視線には殺気が含まれているからだ。

「殺気の気配は…… 5つか」

オレは周りを見渡さないで目だけで周りを見る。

「あれか」

ガラスに映っている2人の男。

明らかにオレのことをチラチラと見ている。

あと3人いるはずだが近くにいないはずだ。

「めんどいけど仕方ないか」

オレは本を閉じて店から出る。

店員は泣きながら挨拶をしていた。

目的もなく商店街を歩く。

5つの気配はオレの後ろでついてくる。

人気の少ないところまで歩いたオレは裏路地に入る。

「ここまで歩けば撒いたかな？」

オレは後ろを見る。

そこには誰もいない。

オレは息を吐き前を見た。

「もう鬼ごっこは終わりかな？」

3人の厳つい男がこつちを見ていた。

後ろに行こうとするが2人が立ち塞がる。

「お前が朝霧海斗だな？」

真ん中にいるリーダー格らしき男がオレに言う。

「朝霧海斗？　だれだそいつ。オレはトツテム・ポールだよ」

男はため息を吐き懷からナイフを出す。

そしてオレの足元に投げる。

ナイフはオレの丁度つま先の前に刺さる。

「冗談はなしだ。もう一度聞こう……お前が朝霧海斗か？」

殺気交じりの声がオレの耳に入る。

こればかりは騙せないな。

「そつだと言ったら？」

オレは男に言う。

「なに簡単なことだ。ここに二階堂麗華を呼べ」

「どうして？」

「お前が知る必要はない」

「そうかよ」

オレは携帯を取り出す。

こいつらは麗華を狙っている。

目的は金かそれとも麗華の命か……

オレには興味はないが命令されるのは御免だ！！

「何をしている？ 早く呼び出せ」

「ああ、分かってるよ」

オレは携帯を叩き割った。

これで麗華とは連絡は出来ない。

「貴様……携帯を壊したということは………」

「ああ、答えはノーだ」

オレは睨みながら言った。

「仕方ない、お前はここで………死ね」

男の死刑宣言で残りの4人がナイフなどの凶器を取り出す。

（1対5か……おもしれえ）

オレは上着を脱ぐ。

はじめに突っ込んだのは後ろにいた大男だった。
俺よりも背が高く筋肉隆々もムサイ野朗だ。

「うおおおお！！！」

右腕を振りかぶりオレの顔面目がけて振り下ろす。
オレは拳を避けるがその際、腕を掴まれた。

「この腕貰い受ける!!」

ミシミシと腕の骨が軋むが――――

「なんだこの腕!! お、折れない!!」

大男がオレの腕を掴みながら吠える。

「当たり前だ、柔な鍛え方はしてねえからなっ!!」

掴まれていない腕で大男の鳩尾に拳を叩き込む。

「うつ!!」

腹筋に力を入れていなかったようで大男は前かがみになる。

すかさず足払いをして大男を転ばせる。

そして顔面を踏みつける。

「ぎゃああああ!!!!」

骨が砕ける音と叫び声上がり、大男の体が痙攣した後動かなくなった。

残り4人。

「中々やるな」

リーダー格の男はさして気にせず淡々と喋る。

リーダー格の男が両脇にいる2人に目配りをする。

そしてその2人が前に出る。

（今度は2人同時か、まあ楽勝だがな）

拳を鳴らしながら前にいる2人を見る。

「今度は俺たち兄弟が」

「相手をするぜ、坊主」

2人が残虐な笑みを浮かべて言う。

「兄弟のわりして全然似てないな」

見た感想をオレは2人に言い放つ。

すると2人から笑みが消えて怒りが感じられた。

「テメエ……言っちゃいけねえ事を言いやがったな」

「楽に死なせてやらねえぞ」

どうやら逆鱗に触れてしまったようだ。

「死ねや!!」

2人がオレに突っ込んでくる。

だがさっきまでの大男とは違いオレを通り過ぎようとしている。

2人の顔はなぜか笑い――

「――っ!!」

突然、悪寒を感じて膝を屈して頭を下げる。

すると前髪の先っぽが切れた。

「チツ、いい勘してやがるな」

通り過ぎた2人のうちの1人が舌打ちをする。

オレは目を凝らして2人を観察した。

するとなにやら一本の糸のようなものが2人の手に繋がっていた。

「ピアノ線か？」

「目がいいな。だが違っぜ、これは世界最硬の糸『スティルリード』だ」

「切れ味も抜群で絡まれたら細切れだぜ」

2人が勝ち誇ったように接近してくる。

「確かにヤバイ代物だな。だけどな……」

オレは2人に向かっていく。

「自ら突っ込んでくるとは自滅覚悟か？」

「どうでもいい！！ これでジ・エンドだ」

2人はオレの首にワイヤーを絡めて引いた。

オレの首はワイヤーの糸で――切れなかった。
なぜならしっかりとワイヤーが付いている腕を掴んでいる。

「「なっ！！」」

さすがにこれには驚いたようだった。

「いくらワイヤーで切断できようがこうされたら無理だよな？」

オレは2人の腕を自分の元に引っ張る。

「お返しだ、おらよっ！！」

ワイヤーの糸から逃れたオレは蹴りを浴びせる。

「がっ！！」

わき腹を蹴られた1人は飛ばされ勢いよく壁にぶつかる。
蹴った感触では骨が折れたかな？

「あ、兄貴！！」

もう片方が飛ばされた方に叫ぶ。

「お前もよそ見していいのか？」

「ひっ！！」

怯えたようだったがオレには関係ない。
手加減なしに顔面に拳を当てる。

殴られたヤツは放物線のように飛んでいき地面に転がる。

「さてさて、あとお前ら2人だけだぜ？」

オレは口元を歪めながらリーダー格の男に言う。

「おのれ……………」

さすがに3人も倒されるとは思っていなかったらしい。
焦りの表情をしている。

「まさか3人もやられるとはな……………驚かされる」

後ろにいた男が呟く。

人目見ただけでオレは直感で感じた。
他のヤツとはレベルが違う。

「最近骨の無いのを相手をしていたから飽きていたところだったが
……………久々にいい殺し合いが出来そうだ」

そう言い懷からナイフを取り出す。
刃あたり20センチくらいか、切れ味が良さそうだ。

「遊ぼうぜ、色男よっ!!」

ナイフで素早くオレを斬りつける。
オレは避けるが相手はさらに手数を増やしてオレを追い詰めようとする。

次第に避けきれずに服や皮膚に掠り、血が滲む。

「ここまで避けられると結構ヘコむな」

ナイフを片手で回しながら男は笑う。

「なに、オレが最強だからだ」

「最強ね……じゃあ俺が勝ったら最強になれるな!!」

ナイフを突き出しながらオレに向かって走る。

ナイフの先にはオレの心臓がある位置。

トドメを刺しにきたか。

「試してみるかな……」

オレは逃げずに構える。

そして2人の身体が重なった。

side 刺客

——殺した

ナイフで確実に心臓を捕らえて刺しに行った。

手には肉を切り裂いた感触がある。

「楽しかったぜ、色男……よ？」

声をだした瞬間、口から何かが出た。

手で口元を触って見ると付いていたのは——血。
なぜ口から血が出ている？

俺は自分が持っているナイフに視線を向ける。

そこには小僧に刺した筈のナイフが俺に刺さっている光景だった。

「な、なんで……？」

俺は目の前にいる小僧に目を向ける。

「ふう、まさか成功するとは思わなかったが上手くいったな」

小僧は平然とした様子で立っていた。

「一体……何をした？」

「ん？ 別に大したことはしていねえよ。前に読んだ本にこういう場面があつてそれをしたただけだ。ぶっつけ本番だったがな」

「そんなの……ありがよ」

口から血が出るが俺は笑った。

最後にこんな出鱈目なヤツと戦えたことが面白かったから――

「負けたぜ……色男……よ……」

俺を倒した男をこの目に焼き付けながらゆっくりと地面に倒れた。

side 海斗

倒れた男を見てオレは思った。
コイツとは気が合っていたのかもしれない。
そう思わせる一面があった。

「こっちこそ楽しめたぜ」

オレはそう言い最後の1人と対峙した。
残された1人は青ざめていた。

「4人ともやられただど!? 話が全然違っじゃないか!」

リーダー格の男は逃げ腰になっている。

「最後はお前だ」

「ひっ」

俺が一步進む度に、目の前の男は一步下がる。
完全に俺の中に潜む悪が相手を包み込んでいた。

「安心しろ、一瞬で終わらせてやる」

「ひ、ひゃあ~~~~!!!!」

男は悲鳴を上げながら路地の奥へと逃げていった。

「なんだよ、命令だけ出すただの雑魚かよ」

敵がいなくなったのでオレは力を抜く。
久々に運動したので少し疲れた。

「さてと……オレは逃げるか」

周りには死屍累々な光景が出来ている。
警察になんか見つかったら確実に刑務所行きだな。
面倒になる前にさっさと退散しよう。
オレは逃げるようにしてその場から去った。

side 修史

「見つからないな」

俺と設子は商店街で不審人物を探していた。
負傷したエージェントから事情を聞き、探しているのだが見つからない。

「逃げられたのかしら？」

設子が逃走したのじゃないか言う。
ここに来るまでも多少の時間が掛かった。
逃げられた可能性も否定できない。

「まだいるかもしれない。人気の無い場所に行ってみよう」

設子も頷いて場所を移した。

人気の無い場所に着いたが周りには誰もいない。
やはり遅かったかと思ったが裏路地から男の悲鳴が聞こえた。

「修史！！」

「聞こえたよ、行こう！！」

俺と設子は悲鳴が聞こえた方向に走った。

裏路地を進んでいると前から1人の男が走ってきた。
顔は恐怖の色で染まっている。

「修史、あの服装……」

「ああ」

走ってくる男の服装は負傷したエージェントが言っていたものと一致する。

こいつが不審人物か。

「おい！！ そこのお前、止まれ！！」

声に気づいた男が止まり距離を取る。

「ま、またガキかよ。なんだって今日に限って何度もガキに会っ

だ！！」

男は意味不明なことを叫ぶ。
かなり動揺しているようだ。

「お前を拘束する、抵抗する場合は実力行使をさせてもらっぞ」
少しずつ男と間合いを詰めていく。

「あああああ！！！！　そこをどけえ！！！！」

男がナイフを取り出し乱暴に振り回しながら迫ってきた。
俺は冷静にナイフを持った手を掴み、顎を殴る。
さらに設子は男の頭に踵落としを喰らわせる。

「ぶぎゃー！！」

男は短い声を上げて気絶した。
踵落としはやりすぎじゃないか？

「弱い男ね」

設子は倒れている男を足で突きながら言う。
オレは本部に連絡する。

「こちらシールド9、本部どうぞ」

『こちら本部、どうだシールド9』

出てきた課長に不審人物の確保を言う。

『よくやったシールド9、10・至急部隊をそちらに送る。しばらく警戒を怠るなよ、以上』

課長はそう言い通信を切る。

「下っ端のようね」

設子が戦闘の感想を言う

「その前になんとか怯えた様子だったよ」

戦う前にこの男の表情は恐怖の色だった。
なにか引つかかる。

「この先で何かあったのかしら？」

設子が男が来た道を見る。

日が傾いて薄暗い通路が続いている。
嫌な感じがする。

「修史、行ってみましょう」

設子が先に歩いて行ってしまう。

俺は倒れている男を動けないようにして設子の後を追った。

「設子？ どこ？」

声を出しながら設子を探す。

角曲がったところで設子を見つける。

「やっと見つけたよ。どうかした？」

設子はなぜか固まっている。

視線の先に何かあるのかな？

俺は設子の近くまで行つてその路地を見た。

そこにあつたのは辺りに血が飛び散り、血を流す男たちが倒れている光景だった。

さすがに声が出なかった。

惨劇があつたと思われる場所に近づきながら周りを見る。

4人の男がいたがすでに死んでいる。

顔が潰れた者やナイフが刺さっているなど多種多様だ。

「だれがこれを？」

4人相手に1人では勝つことは難しいだろう。

だとすれば大勢の戦闘でやられたのか？

俺はあらゆる想定を考える。

そこに設子が俺に言う。

「そつえばさっきの男、ガキがどうか言つてなかった？」

その言葉に俺は驚く。

『ガキたち』ではなく『ガキ』ということは1人で4人を叩き伏せたことになる。

ガキだから歳もおそらく18歳くらいが妥当だろう。
しかも全員殺している――

「一体だれなんだ……」

俺は顔を上げて空を見る。

空は血のように赤く裏路地を不気味に照らしていた。

暗躍する刺客と無情たる凶者（後書き）

いやあ、戦闘がちよつといい加減でしたかな？

今回は海斗が活躍しました。

自衛隊員を半殺しにした海斗だったら楽勝もんですかね？（笑）

今回の感想などお待ちしています

ではまた次回（ハ・ハ）ノシ

戦いの前夜（前書き）

こんばんわ、夜行性の黒猫です。（嘘です）
今回は2話をドドンと更新しました。
自分でも驚いています。
では本編どうぞ

戦いの前夜

side 修史

俺と設子は居間でご飯を食べている。

しかし俺はあまり箸が進まない。

昼間のあの光景を見てから心の片隅にモヤモヤと何かが残っている。
学園に戻ってきてても授業は上の空――

「修史、食べないの？」

設子が心配そうに見つめてくる。

「なんでもないよ」

俺は苦笑いをして箸を進めるが喉に通らない。

設子はため息をして再度俺を見る。

その目には決意を決めた炎が宿っていた気がした。

「あの光景を気にしているでしょう？」

核心に触れた言葉。

その言葉に俺は箸を置く。

もう設子には言い逃れ出来そうに無いな。

「うん……ちょっとね」

俺は言葉を濁す。

別にあの光景を見てショックを受けたわけではない。

あのような光景は課長と傭兵生活をしていた時に何度も目にしている。

設子にとってはもう当たり前の光景だったのかも知れない。
ではなぜ俺たちは気にかけるのか？

それは――

「あれをやったのは年齢で言えば18歳程の青年……」

設子は小さく言う。

そう4人を殺した犯人が自分達より若い青年だということ。
その場にあつた死体を見る限り、相当の実力だとわかる。
体格も蹴られていた痕を見る限り180は超えているだろう。

「まだ青年なのに殺人に手をかけているのか……」

俺は指を組み、ため息を吐く。

こんなにも人の命を亡くすことができるのかと。

「ピピッ、ピピッ、ピピッ、ピピッ、ピピッ」

突然携帯が鳴り、ディスプレイを見る。

相手はアイギス本部だった。

「こちらシールド9、本部どうぞ」

『こちら本部、シールド9、10』

画面に映るのは課長、まあ当然か。

『突然だがお前達に連絡がある』

「何かわかつたんですか!？」

俺は画面に向かって叫ぶ。

画面に映る課長は顔が近いと文句を言う。

『興奮するのはいいが抑えろ。さて……最初に言うがいい知らせと悪い知らせがあるがどちらが先に聞きたい?』

いい知らせと悪い知らせ?

なんだかよくあるパターンだな。

「じゃあいい知らせからで」

『では言おう。犯行グループの名がわかった。その名前は『embrace of Death』。直訳すれば死神の抱擁と読める。意味からすれば死神に狙われたら……終わりって感じたな』

課長は皮肉げに言う。

俺もその意見には同感だ。

『そして悪い知らせだ。お前達が捕まえた1人の男だが……搬送中に殺された』

「「えっ!!!」」

課長からの言葉に俺と設子は声を上げる。

今日掴まえた男が殺された?

『うむ、正確に言えば搬送途中に何者かによってタイヤを狙撃され車は横転。さらに道路に飛ばされた男の頭部に弾丸が命中して即死

だ。おそらく情報の漏洩を阻止だろう。幸いにもウチの部下は軽症で済んだが……」

「それで狙撃したと思われる人物は？」

『発見には至らなかった。おそらくプロの仕業だろう。辺りに痕跡が見当たらなかった』

「そうですか」

俺は課長の報告を聞く。

『搬送中に男は目を覚まし、助けてくれを騒いだらしい。失敗すれば死を意味することがわかっていたようだ』

「失敗したものには死ですか……」

簡単にも部下の命さえも奪ってしまう組織。
この組織はなんとかしなければいけない！！

「課長、その『embrace of Death』は聞き覚えがあります」

今まで何も言わなかった設子が課長に言う。

『ほう、どんなことだ？』

「私がフランク스에いた時のことですが、その組織には決して手を出すなと上司に言われていました」

『と言うと？ 手を出した組織は』

「跡形も無く壊滅されています」

設子は一切の迷いも無く言い切る。
そこまで危険な組織なのか。

「こう言うては失礼ですが、今回の護衛は過去最高レベルの難易度
と思います」

設子は画面の課長に語る。

話を聞いている課長は顎鬚を掻きながら考えている。

『シールド10、用件はわかった。では君は今回の護衛を辞めるか
ね？』

課長は設子に聞く。

これだけの危険が付き纏う任務だ。

普通だったら他人の命より自分の命を優先するだろう。

設子は一度俯くがすぐに画面を見る。

「いえ、任務を引き続き遂行します」

設子は課長に任務を続行すると宣言した。

『シールド9、お前はどつする？』

俺はどうするだつて？

恋人が危険な目に遭うのに見過ごせるわけないだろう

「自分も任務を遂行します!!」

その言葉に課長は笑顔をみせた。

『了解だ、こちらでも惜しみなく協力をする。2人とも任務の成功と無事を祈る、ではこれで通信終わりだ』

そう言い本部との通信が切れた。

「過酷な任務になりそうね」

「そうだね、でも1人じゃない」

「ええ、修史」

そして夜は更けていく。

side 海斗

二階堂邸に帰ったオレは早々麗華に怒られた。
どうやらオレが居ないために帰宅は車に乗って帰ったのが気に入らなかつたらしい。

「どうしてアンタは授業もサボって、それで夜になるまで帰ってこないのよ!!」

ベッドに座り、腕を組んでオレを睨んでくる。

部屋の隅では麗華の怒気に怯えて、ソナタとカナタは丸くなっている。

オレもそっちに行きたいぜ

「仕方ねえだろ。本を読むのに夢中だったんだよ」

オレは麗華に嘘を吐く。

麗華を狙った誘拐犯を4人殺しましたなんていったら……想像するのはやめよう。

「アンタは本のことになると人一倍真剣になるんだから……」

何も知らない麗華は永遠とオレに文句を言ってくる。

こっちは命を懸けて戦ったっていうのにこの扱いは少々酷い。

もし『お前を誘拐しそうなヤツを懲らしめた』といえどどうなるだろう？

『私のボディーガードなんだからそれくらい当然でしょう？』

なんて言いそうだな。

……いや、絶対言っな。

目の前の麗華を見る限り簡単に想像がつく。

「……だから、って話聞いているの？」

「もちろんだ」

突然振られて話を合わせる。

「まあ、今度からは私に一声かけてからにしないよ」

「へいへい」

オレは返事をして麗華の部屋から出て。

「ふう」

部屋を出た途端、オレはため息を吐く。

やれやれ、かれこれ30分の説教か……肩が凝るぜ。
自分の部屋に戻ろうとすると腹から音が鳴る。

「無駄な労力を使ったからハラが減ったな」

オレは足を食堂に向ける。

まだ食堂は電気がついていて誰もない。
もうすぐ日付が替わる時間だから当然か。

「なにかないかな」

オレは厨房を覗くが食材など調理前のものしかない。
ならばどうするか？

もちろん作るしかない！！

「クッキング海斗の登場だな」

オレはYシャツの腕を捲る。

果たしてどのような料理が出来るのか、俺にもわからん！！
しかし！！食べるものなら食べるはず！！
冷蔵庫に入っている食材を見定める。

「うーん、なんの食材かさっぱりだ」

早くも挫折しそうなオレ

これでは飢え死にってしまう。

「そのこそ泥、なにしてる」

後ろから声がした。

オレがこそ泥だと？

オレはこそこそ盗みはしない。

むしろ堂々とする派だ。

「盗んじやいねえよ……つてお前かよ」

後ろを振り返るをそこにはツキがいた。
しかも箒の柄をオレに向けている。

「海斗、なにしてる」

「ハラが減ったんだよ」

「夕食食べたのに？」

「その後の麗華の説教で疲れてハラが減った」

「それは自業自得」

「うるせえ」

他愛もない漫才をしている気分だ。
そんなことより飯だ飯！！

「今から飯作るんだよ、あっち行け」

「海斗は料理が出来るの？」

「いや全然、むしろこれが初めて」

「家が火事になるんじゃ……」

失礼なやつだ。

どうやったら火事になるんだ……

「……仕方ない。海斗少し待って」

「なんだよ、代わりに作ってくれんのか？」

「いいから待ってる」

そう言いツキは俺を厨房から出して、奥に入ってしまった。
それから数分後――

「はい、どうぞ」

目の前に出されたのは茶碗に入った白米……だけ――

「ツキ、お前なめてんのか？」

「ちよいと待たれよ海斗。まだこれからよ」

そう言いツキはポケットから何かを取り出す。

「タラララッララッ」 ふりかけ」

「……………」

こいつ絶対オレのことを舐めてやがる。

「さあ海斗、種類を選びたまえ」

目の前にふりかけが出される。

仕方ないのでたまごを選択――

「見かけによらずお子様ですね」

「うるせえな……………」

オレはご飯にふりかけをかける。

「どうぞ、召し上げれ」

オレはふりかけがかかったご飯を食べる。
しかしそのご飯は美味しかった。

「ふう、ご馳走様」

オレは茶碗をツキに返す。

「今回は特別です。以降、このようなことを起こさないように」

「わかったよ」

オレはハラを少し満たせたので自室へと戻る。

戻る際に窓から見える空を見た。

禁止区域から見ても同じ星空。

「空はいつ見ても綺麗なのに……俺が住む世界はいつも汚いな」

そう呟きながら足を進める。

星空は変わらずに美しく輝いていた

戦いの前夜（後書き）

こんな感じの組織名にしてしまいました。

訳は合っているかな？（不安が残る）

かなり迷ってしまいましたがいかがでしょうかね？

では次回にまた（＾－＾）ノシ

囚われた主君

side 修史

変わらない朝を向かえ俺たち2人は学園へと向かう。
学園に着き、クラスメイトに挨拶をして席に着く。

周りにいる人は変わらない日常を送っているが自分達は違う。
内心は焦りがあった。

敵の素性が割れた今は警戒を強化しなければならない。

設子話を聞く限り、厄介な組織であることは明確だ。

遠距離からの狙撃も有り得るし、この前のように誘拐などの手段も
してくるだろう。

「あつ海斗、おはよう」

侑祈の声で俺はドアを見る。

海斗と麗華お嬢様が着たみたいだ。

「おはよう海斗」

「おう」

海斗は席に座る。

「海斗、昨日はどこに行ってたの？」

昨日の昼以降姿が見えなかったので聞いてみる。

「読みたい本があったから商店街まで行って夜まで立ち読みしてた」

「夜まで！？……麗華お嬢様に何か言われなかった？」

「言われたに決まってるだろ。ギャーギャーお説教だよ」

海斗は横目で麗華お嬢様を見る。

かなり怒られてたみたいだ。

「それは自業自得だよ。でも海斗は読書家なんだね」

夜まで立ち読みしていたのだから、と俺は海斗に言う。

「まあな、唯一の楽しみが読書だ」

俺と海斗は世間話をする。

そこに侑祈も交じり話が盛り上がる。

設子は設子で麗華お嬢様と妙お嬢様で話していた。

「おっはよう皆席に着いてね」

今日も元気に朱美先生が教室に入ってくる。

クラスの皆も素早く席に座る。

そしていつも通りの時間が流れた。

あっという間に放課後になり生徒はそれぞれ帰宅していく。
麗華お嬢様も同様に帰宅の準備をしていた。

「海斗、帰りに寄り道するから」

麗華お嬢様は海斗に言う。

どうやらどこかに行くらしい。

俺は設子を見る。

設子も聞いていたらしく頷く。

設子は麗華お嬢様に声をかける。

「麗華さんはこの後どこかに行くんですか？」

「あら聞こえてた？　ちよつと商店街までね」

「そうですか……もしよろしければご一緒にいいですか？　まだ商店街のお店をあまり知らないのです」

「別にいいわよ。それじゃあ行きましょう」

俺たち4人は商店街に向かった。

どうやら麗華お嬢様は洋服を見たかったようだった。

中には俺たちのような男性が入れない店もあったので店の外で待つ。海斗は『女の買い物は長いから嫌い』だと愚痴っていた。

「それじゃあまた明日」

時間が経ってもう夕方だ。

そろそろ夕食だと麗華お嬢様は家に帰ると設子に言う。

「こちらこそわざわざありがとうございます」

そう言っ
て俺たちは海斗たちと別れた。

「今回はなにも起きなかったわね」

「そうだけどまだ油断はできない」

「そうね」

俺たちは自分の家へと帰る。

その姿を1人の男が暗い路地から観察しているのを修史たちは気づかなかった

side 海斗

「やっと帰れるぜ」

オレは大きく背伸びをする。
何時間も立っただけで足が痛い。

「だらしないわね、少しは我慢しなさい」

「それでも頑張ったほうだぞ」

麗華の言葉にオレは反論する。

二階堂に向かう途中で本屋が目に入った。
そこにはなにわの最新刊が置いてある！！

「麗華」

「何？」

「本買ってくれよ」

「何言ってるの、アンタ今月本買い過ぎ。いくら使ってると思ってるの？」

「今日頑張った御褒美で」

「ダメ」

「ケチ」

「うるさい」

麗華は買ってくれなさそうだ。
金持ちのくせにケチってやがる。

「仕方ない。荒らすか……」

「荒らす？」

「俺のピッキング技術で自販機の金を盗る」

「バカ言ってるじゃないわよ!!」

「いや、本気だけど」

オレは堂々とピッキングの道具を取り出す。

「本気？」

「本気」

麗華は一瞬考え、そしてため息を吐いた。

「わかったわ、買ってあげる。待ってなさいお金下ろしてくるわ」

「カードがあるじゃん」

「記録に残るわよ？」

「下ろしてきてください」

「結構」

そう言い麗華はATMがあるコンビニを探しに行った。
記録に残ったら源蔵のおっさんにはれるからな。
二階堂で本を読む人物はあのおっさんとオレくらいだ。
ばれたら後々面倒だからな。

（麗華が来るまでの間、他の本でも物色しているかな……）

オレはそう思い本屋に入って行った。

（まったく、世話が掛かるボディガードだわ）

そう思い私はコンビニを探す。

かれこれ海斗の本代は軽く10万は行っただんじやないかしら？
なんて本好きなんだろう。

「まあ、私に合っているボディガードはアイツくらいかしらね」

私はそう呟く。

横のガラスを見ると自分が映っている……笑っている。
笑っている？ なぜ？

無意識に内に私は笑っていたようだ。

「ほんとアイツが来てから騒がしくなったわ」

昔を思い出すが今は早くお金を下ろさないと。

（コンビニは……あった）

まだ遠いがコンビニの看板が出ている。

コンビニに向かって走るがそこに魔の手が伸びた。

ビル同士の間にある路地から手が出てきて私の腕を掴む。

「えっ!？」

掴まれた腕の先には男がいた。

薄汚い身体に服はシャツとズボンだけ……

「お前が二階堂麗華だな？」

まるで獲物を見つけたように男は笑う。
その笑みはとても醜悪だった。

麗華は一目見て確信した。

『この男は危険だと……』

「離して!!」

麗華は腕を振り解こうするが離れない。
それどころか徐々に力が強まっていく。

「逃がすわけないだろ!! お前を捕まえれば俺たちは金や飯が手に入るんだ!!!!」

男は麗華を路地に引きずり込む。

麗華は声を出して助けを呼ぼうとしたが布で口を押さえられた。
そして徐々に意識が朦朧としてくる。

「かい……と……」

意識が切れる瞬間に自分のボディガードの名前を言う。
そして目に映るのはさっきの男だけ。

麗華はとうとう意識が切れ、深い闇へと墜ちていった。

「おせえーな麗華のやつ。なにやってんだ？」

オレは本を閉じて時計を見る。

もう15分は過ぎている。

お金を下ろすだけに時間が掛かりすぎている。

オレは本屋を出て麗華が向かった方向を見る。

もう日が落ちようとしており人が少ない道路。

(……………まさか)

オレは嫌な予感がして走り出した。

(どこまで行っただ?)

十字路で止まり辺りを見渡す。

そして遠くで麗華を見つけた。

しかし麗華はビルの隙間に視線を向けている。

そしてビルの隙間から麗華の腕を掴む手————マズイ!!

オレは麗華の元に向かう。

麗華は抵抗していたが力負けしたのか引きずり込まれる。

「麗華!!」

麗華が引きずり込まれた路地に着いた俺が見たものは麗華を抱えて逃げようとする男。

「ちっ、追っ手か。逃げるが勝ちってな!!」

男が全力で逃げる。

「待ちやがれ!!」

オレは男を追う。

しかし追っても中々追いつけない。

この男、かなり地形を把握していやがる。

（麗華がもう少しデカけりや速度が落ちるのに）

麗華が小さく体重が軽いため、男は走る速度もあまり落ちない。
しかもこの身体能力の高さ……

（格好からして禁止区域の住人か）

現に男は禁止区域に向かって走っている。

周りの壁はボロボロになっていき、悪臭が鼻を刺激する。
そしてオレは男を追って禁止区域に入った。

「観念しやがれ!!」

禁止区域に入ってからオレは追いかけてくさしていた。

男はスタミナ切れを起こしているがオレを振り切る。

そして少し広い広間に男は逃げ込み足を止める。

「やっと……ハア……観念したか」

オレは呼吸を整える。

対する男は麗華を壁に横たわらせてオレに向き合う。

「中々しつこいヤツだ、お前みたいのは初めてだぜ」

「そいつはどうも」

オレは挑発交じりに返す。

だが男は笑っている。

「だがこれまでだ。お前はここで死ね!!」

男の声で周りからぞろぞろと人が出てくる。

全員禁止区域の住人だ。

「お前達、この男を殺した奴は分け前を増やす!!」

その言葉に周りから雄たけびが出る。

どうやらこの男はかなりの人数を従えているヤツらしい。
その前に……

「オレを殺すだと? ……クッククク」

オレは男の言葉を聞いて笑う。

笑ったのが気に食わなかったのか集団の中から1人オレに突っ込んできた。

周りからは『殺せ!! 殺せ!!』と殺人コール。
リーダーの男も腕を組んで笑っている。

「死ねや雑魚が!!」

突っ込んできた男がオレに拳を叩きつける。
誰もが当たったと思っただろうが――

「こんなのでオレを殺すだと？」

拳を掴んだオレは不敵に笑う。

そして掴んだ拳を握り潰す。

骨が碎ける音と叫び声が広場に響く。

「うるせえんだよ！！」

オレは叫んでいる男を殴り飛ばす。

殴られた男は痙攣していた。

その光景を見た周りから声が消える。

そして感じられたのが殺気だけ。

「かかってこいよ、どっちか雑魚か教えてやる」

その言葉を聞いた住人は一斉にオレへと向かってきた。

戦いの火蓋は切って落とされた。

「さあ……惨劇の始まりだ」

オレはスーツを脱ぎ捨て大勢の中に走って行った。

家に帰った俺たちは夕食作りの真っ最中だ。
調理は俺で食器を出すのが設子の仕事。

「よしっ、出来た!!」

俺がテーブルに鍋を持ってくる。鍋の中身はポトフだ。

「それじゃあ食べようか」

ポトフを器に入れようと思っていたら携帯が鳴る。

「はい、如月です」

『如月様ですか？ 私は二階堂邸メイドのツキといいますが』

電話の相手は二階堂からだった。

番号は教えていないはずだが……

『ご心配なさらず、番号は佐竹校長から聞きました』

「そうですか。それでなんでしょうか？」

『では用件をお伝えします。麗華お嬢様はそちらにいらっしやいますか？』

「いえ、なぜですか？」

『それが……麗華お嬢様がまだ帰ってこないのです』

「帰ってこない？」

それを聞いた俺は一旦思考が停止した。
帰ってこない？ 攫われた？

悪いイメージが頭に流れ込んでくる。

電話相手のツキは話を続ける。

『倉屋敷のお嬢様にもご連絡した際に、設子お嬢様が麗華お嬢様と
買い物に行くと話していたことを耳にしていたらしく連絡させてい
ただきました』

「……そうですか」

『もう一度お聞きします。麗華お嬢様を別れたのは？』

「6時頃です。夕食があるといって別れたのが最後です。そのまま
帰ったのばかりだと……」

『そうですか、お話頂きありがとうございます』

「あのっ、これからどうするんですか!？」

『今、旦那様が他のボディガードを集めて搜索するようです。そ
れでは失礼します』

そう言い電話が切れた。

俺は即座にアイギスへ連絡した。

『こちら本部だ』

「課長！！ 二階堂麗華が誘拐された可能性があります！！」

俺は課長に持つている情報を話した。

「話はわかったが修史、二階堂麗華がどこにいるかがわからなければ手の施しようがない」

確かにそうだ。

居場所のわからない相手を見つけるのは至難の業。

いくら辺りを探し回っても見つけなければ助けることは出来ない。
ではどうすればいいんだ！！

「修史、大丈夫よ」

設子は携帯を取り出してなにやら操作している。

そして目の前に出されたのは地図。

真ん中には赤い点が点滅している。

「設子……それって……」

「ええ、麗華さんの居場所よ。買い物時に彼女の襟部分に発信機を着けておいたの」

設子はそう言つて俺に携帯を渡す。

さすが俺の相棒だ！！ 自分には出来ないことを彼女はやってくれる

『いい判断だ設子。修史、発信機的位置をこちらに転送しろ。場所を特定する』

「わかりました」

俺は携帯を操作してアイギスにデータを送る。

「データを確認した。少し待っているよ」

そして待つこと3分

『修史、場所がわかったが……驚くなよ』

「場所はどこですか!？」

『場所は……禁止区域だ』

課長が行った場所は正に危険地帯。

犯罪者が住まう廃墟の町。

『どうする修史?』

どうするだつて?

やることは決まっている。

「シールド9、二階堂麗華を救出に向かいます」

「同じくシールド10もシールド9と共に向かいます」

『……了解した。武器の装備を許可する。お前達の健闘と生還を祈る!』

「了解!」

俺と設子は服を着替えて武器を持つ。

「行こう設子」

「麗華さんを助けましょう、修史」

俺たちは部屋を出て麗華の元に向かった。

囚われた主君（後書き）

今回はかなり強引な展開になってしまったかな？
自分ではそう思っちゃたりしています。

さて次回は待望（？）の海斗VS修史&設子です
どうなるかわかりませんがご期待ください！！

感想待ってます（>3<）

それでは（^-^）ノシ

対峙する守護者（前書き）

こんばんわ、黒猫でしゅ。

今年は財布の紐が緩くなりそうな感じです。

なぜか！？面白そうなゲームが出るからです（笑）

茶番はこれくらいにしましょう

今回は海斗視点でお送りします

では本編へどうぞ

対峙する守護者

side 海斗

「これは……ピンチかな？」

オレは腕を押さえながら弱弱しく言う。

身体は傷だらけ、押さえている腕に関しては多分折れているだろう。そして周りには大勢の禁止区域の住人がひしめいている。

「たかが1人でこの人数に向かう時点でお前の負けは決まっているんだよ」

オレが追いかけていた男は鉄パイプを手に笑っている。
完全に勝ち誇っているようだ。

「まだ……わからないぜ？」

オレは挑発的に男を見る。
対する男はその言葉に大笑いする。

「この状況でよくそんなことが吐けるな。いい度胸してるじゃねえか!!」

男が手を挙げる。

それと同時に近くにいた2人がオレに向かってくる。

「ちっ!!」

オレは片手で2人の攻撃を受け流すが受け流せない攻撃がオレの身体に当たる。

両手ならともかく片手だけでは死角に入られると反撃が出来ない。徐々に残り少ない体力が削られていく。

「もうこれで終わりだ」

2人の男がオレを押さえ込まれる。そして一歩ずつ近づいてくる。

「最初の威勢はよかったが所詮、表の人間が俺たちに勝てるわけないだろ？」

オレの髪を掴んで嘲笑いながら喋る。

オレは話を無視して男の顔に唾を吹き付ける。

唾をつけられてキレたのか男はオレの顔を蹴りつける。

「てめえは調子に乗りすぎだ、死ね!!」

手に持っていた鉄パイプを振り上げる。

目標はオレの後頭部、当たり所によっては死ぬだろう。だがこいつらは気にしない。

この世界での殺しなんて日常茶飯事なのだから……

「がつ!!」

頭に響く痛み、暗くて見えないが頭から頬に流れる粘着性のある液体。

視界が次第に悪くなる。

耳に聞こえるのは周りからの笑い声。

そして見えるのは壁に横たわっている麗華の姿。
手を伸ばすが届かない。

再度の衝撃で遂にオレの意識はブラックアウトした――

「んなわけないか」

そんなシチュエーションを考えながらオレは殺し合っていた。
小説でこのような場面があったので思い出してしまった。

「このやろお!!」

1人が勇敢にもオレに拳を振るうがそんな攻撃ではオレには掠りともしない。

お返しとばかりにクロスカウンターをお見舞する。

骨が碎ける音と共に男を殴り飛ばす。

周りには血を流し、意識がない者、生命が宿っていないモノなどが
地面に横たわっている。

30〜40人ほどいたが所詮は物の数、指揮官が屑であれば烏合の
衆である。

人数ももう1／3程になっていた。

「たかが1人になに手間取っている!!」

余裕だった男は殺られていく手下を見て焦る。

1人、また1人とオレは自分に向かってくる者を叩き伏せ男に向かつていく。

中には殺されるのを恐れ逃げ出す奴までいる。

「さつさと消え失せる雑魚が」

オレは頬に付いた返り血を指で拭う。

「なんでお前は死なない!？」

男は半狂乱に喚く。

この男のプライドだろうか？

逃げる素振りを見せない。

「死なない？ 当たり前だろ。ここは禁止区域、弱きものは死に強きものが生きる世界」

2人同時に蹴りと拳がオレに迫るが全て対処する。

拳は手で止め握り潰す。

蹴りはこちらも蹴りで迎撃する。

両方からグシャリと嫌な音が鳴る。

「骨の鍛え方が甘いんじゃないか？」

手を押さえている男と足を押さえている男に必殺の蹴りをぶち込む。
口からは血を吐き、そして絶命――

「これが禁止区域さ、そうだろ？」

オレはにこやかに男に言う。

声をかけられた本人は怯える。

「親方！！ こいつは……あの朝霧だ！！！！」

男の近くにいた奴がオレに指を指しながら叫ぶ。
どうやらオレのことを知っているようだ。

「朝霧？ まっ、まさか！！ 特区を一人で支配していたあの朝霧か！？」

「そうです！！ 狙われたら最後、皆殺しにされる凶者、朝霧海斗です！！」

オレの名前を聞いた手下はどんどんオレから離れている。
こうゆう時に恐れられるのはいいんだがな……

「そーゆーこった、だから死にたくなかったら失せろ」

オレは麗華の元に行こうとする。
だがリーダーの男は麗華の元に寄る。

「海斗とかいったな。これ以上こちらにすればこのガキを殺す！！」

麗華の首に手をかけてオレに言う。

まだ抵抗するのか……しつこいな……

「こいつはお前の大事な人間なんだろう？ 殺されなくなかったらお前が失せる！！」

「は？ 何を勘違いしてやがる」

オレは抑えていた殺気を開放する。

殺気に当てられたか周りの雑魚は耐え切れずに気絶したり逃げたりする。

麗華を人質にしている男は気絶しなかったが顔が真っ青だ。

「このオレが困るだど？」

オレは歩く――麗華の元へ

男は下がろうとするがいた場所は壁際、逃げ道はない。

「そいつはオレの退屈しのぎでしかない。それ以上でもそれ以下でも」

「くるんじゃねえ！！！！」

麗華の首を絞めようとするがオレが先に腕を掴む。掴まれた男は目を見開いてオレを見る。

目に映るのは強大な悪の塊かそれとは別のなにか

「そしてお前みたいな奴が触っていい女でもない」

腕をへし折り男を投げ飛ばす。

よほど怖かったのか男は気絶していた。

「まったく、張り合いがねえな。さてと……おいつ、麗華起きろ」

麗華の頬をぺちぺちと叩くが全く起きない。

「薬かなにかで眠らされたか？ 全然起きないし……………無性に落書きがしたいぜ」

ポケットを漁るがペンが出てこない。

こんな機会がありませんのでやっておきたいオレ心。

「血で描こうかな……………やめとこ」

バレた後が怖いので血で描くのはやめよう。

「二階堂に帰るか。おっさんとか狂ってるかもしれないし」

時間はもう遅い。

さっきまで見えた満月は雲に隠れ辺りは真っ暗だ。

暗闇での行動は危険が付き纏う。

さっさと禁止区域からでねえとな……………

「……………」

麗華をおぶろうとしたが背後から気配がした。

普通なら気づかないが血だまりに足をついた音がした。

声は出さずに背後を見る。

暗くてあまり見えないが2人の姿が見える。

向こうもこっちの存在に気づいたようだ。

なにやら武器を取り出す。

（禁止区域でも武器は手に入るからな、新手か？）

そう思っている間に俺は相手に向かって駆け出す。
オレにとっては武器がなんであれ関係ない。
銃だった場合は少々危険だが、視界は悪く障害物だつてある。
余程のミスがなければ当たらないだろう。
オレは未知なる相手と戦いを始めた。

side 修史

「結構入り組んでいる所までいるんだな」

携帯の画面を見ながら俺と設子は麗華の所まで進む。

設子が辺りを警戒しているがここには禁止区域の住人はいないようだ。

「修史、向こうで声が聞こえるわ」

設子が声があつた方向を指差す。

俺も耳を澄ましてみると確かに聞こえた。

「その方向は麗華がいるポイントだ」

「どつやらピンゴね」

設子がナイフを2本取り出す。

俺は銃を取り出す。

弾はゴム弾、無用な殺生は避けるためだ。

「急ごう」

「ええ」

俺たちは一気に路地を進んだ。

「ここは……………」

路地を出たところは広い広間だった。

月の明かりがないので暗い。

「この先に麗華がいる」

携帯の明かりを消しポケットに入れる。

この暗さだ、明かりなんであればすぐに敵に場所がわかってしまう。

奥へと進もうとするとピチャッと音がした。

水たまりかと思ったが違った。

理由は血のにおいがしたから。

「修史、待つて」

設子が手で制止、奥を見る。

俺も奥を見るとそこには誰かがいた。
しかもこちらを見ているようだ。

（禁止区域の住人か？）

小声で設子に聞こうとしたが相手がこちらに勢いよく向かってきた。
どうやら敵と認識されてしまったようだ。

（設子！！）

設子にアイコンタクトをして俺たちは別れ、禁止区域の住人らしき
人物と戦闘を開始した。

s i d e 海斗

どうやら相手は2手に別れたようだ。
気配を消して壁際に身を潜める。
視覚が使えない分、聴力が頼りになる。
目を瞑り耳に神経を集中させる。

「……………」

遠くで微かに音がしたがそれは無視しよう。
近くににじり寄るような音が聞こえる。

音からして5メートル弱か？

「いっちょ仕掛けるか」

息を整え壁から離れる。

そして相手に向かって加速する。

「……！！」

相手も気づいたらしくこちらを見る。

オレは一気に懷に潜りこもうとしたが自分の直感が何かを感じ取る。
急ブレーキをかけ横に飛ぶと銃声が鳴った。

「あぶねえあぶねえ」

あのまま突っ込んでいったら弾が当たるところだったぜ。

にしても今の銃は……

なにかがオレの中で引っかかる。

（腕一本……試してみるか）

オレは瓦礫を移動しながら相手に接近する。

相手は辺りを見回してオレを探しているらしい。

オレは背後から殴り飛ばそうとするが相手はいきなり後ろを見る。

（気配を察知された？ やるじゃねえか！！）

オレは腕で急所をガードしながら接近する。

相手は自分に向かって銃口を定める。

（今だ！！）

オレは左腕を大きく横に掲げる。

相手は咄嗟にオレの左腕に標準を変えた。

本来人間は動くものを見てしまう。

戦いにもなれば動くものには敏感に反応してしまう。

相手が手に凶器を持っていればそれに目がいく。

だが今回はどうだろう？

暗闇で相手の装備は不明。

しかも自分に向かってくる途中にいきなり手を横に挙げる。

大抵の経験者ならば手に持っているのがナイフなどの凶器を連想してしまうだろう。

ドンッ！！

予想どおり相手はオレの左腕を撃ってきた。

左腕に激痛が走りオレは撃たれた腕を見る。

（やっぱりな）

オレは撃たれた腕を見て笑みを漏らす。

自分の腕は血を流してはいなかった。

手に当たっていたのはおそらくゴム弾だろう。

最初におかしいと思ったのは初弾が外れたときだ。

弾が外れれば壁や地面に当たり、壁などにめり込む音がする。

だが今回はその音がしなかった。

遠くにいったという可能性もあったがあの時オレの後ろには石の壁があった。

間違いなく壁に当たりめり込む音がするはずだった。

考えた末にオレは左腕を犠牲にする方向で行った結果は見事にピン

ゴだったわけだ。

（ゴム弾となれば死の危険は減る。いける！！）

両腕でガードしつつ相手との距離を縮める。

相手はさらにオレに弾を浴びせるがオレはスピードを緩めない。弾が当たってもただ激痛が襲うだけ。

血は流れずに銃創も出来ない、オレにとっては意味のない攻撃だ。

カチン、カチン

ただ金属音が鳴り俺に弾が飛んでこない。連射のしすぎで弾切れしたみたいだ。

「おら！！」

身体を回転させ回し蹴り叩き込む。

相手は銃でガードしたが力負けでガードした銃は遠くへ飛んでいった。

これで相手は無手になった、条件はイーブン。

相手に近づこうとするもそれをもう片方の相手が邪魔をした。どうやらさっきの銃声を聞きつけ飛んできたみたいだ。

手には2本のナイフ、見る限りかなりのやり手だ。

「はっ！！」

2本の刃がオレに牙をむく。

オレは避けるが相手はさらに懐に入り込んでくる。

（さっきの奴より攻撃に殺気が混じっていやがるな）

ナイフを避けながら相手の気配を読み取る。

隙が出来たところを蹴りを入れるがナイフのブレードで受け止める。だが相手は驚くほど飛ばされるが綺麗に着地する。

（軽いな………女か？）

蹴った割には自分にくる衝撃の無さにオレはナイフを構える相手を見る。

未だに月は雲に隠れ相手の素性がわからない。

（だとすれば久しぶりに強い女か、杏子以上か？）

だがいくら強くたってオレの足元にも及ばない。

相手の鳩尾辺りに渾身の蹴りを当てようとする。

相手はナイフを重ねて蹴りを防ごうとするが強度が足りなかったらしい。

2本のナイフは折れ、蹴りが命中して後ろに飛ばされる。

多少威力が落ちたがこれまでの戦闘は出来ないだろう。

「——！！！」

もう1人の相手が蹴り飛ばされたヤツに声をかけようとする。

戦闘中で自分より他人の心配か………つくづくこいつらは甘すぎる。

「そこのお前、死ぬ気でかかって来いよ！！！」

オレが蹴りを当てようとするが避けられる。

さらに追撃するが当たらない。

（コイツ、中々の回避能力だな…………）

相手も攻撃を避けながら反撃してくるが攻撃に脅威を感じられない。戦闘訓練はされている動きだが攻撃に殺気が籠っていない。先ほどのナイフを持っていた女の方がまだやり甲斐がある。

（ささつと終わらせて帰るかな）

拳を避けて相手の腕を掴み投げ倒す。

相手は起き上がろうとするがオレは足で腹を押さえつけて動きを封じる。

こいつなりにはよくやったが相手が悪かったな。

「あばよ」

腕を振り上げ相手にトドメを刺す。

一撃だ——— 必殺の一撃

それでコイツは死ぬ。

だがそれは叶わなかった。

今まで雲に隠れた満月が顔を出し、戦っていた相手の顔が露になった。

その顔はオレが知る顔———

「……………修史……………か？」

目の前にいたのは転校してきたボディーガードの修史だった。修史もオレの顔を見て言う。

「海斗……………なのか？」

2人の守護者が満月の夜で死闘を演じ、対峙した……………

side ???

「この辺りか……………」

禁止区域を歩く1組の男女。

「もうすぐ合流ポイントだな？」

「そうね、たしかこの先」

隣にいた女性が男性の質問に答える。

「二階堂麗華を捕獲していた場合は報酬を渡し……………」

「失敗していた場合は……………死を」

女の返答に男性は微かに笑う。

「どちらでもよい。破壊^{こわ}せるならオレは別に問題ない」

男性は歩みを進める。

女性はため息を吐くが口元は笑っていた。

新たなる刺客が海斗たちに近づいていた………

対峙する守護者（後書き）

期待してくれていた人、どうだったでしょうか？

面白いと思ってくれた人には感謝感激です。

さて次回はオリキャラを登場させたいと思います。

とある漫画の人物を参考に行っているので知ってる人は解ると思います。

では（＾・＾）ノシ

禁止区域の強者たち（前書き）

どうも黒 猫です

皆さんに頂いた感想の中で『海斗は最強』などの意見が多かったです。

考えた末、海斗はほぼ最強キャラにしたいと思います。（雅樹は別として）

では本編へどうぞ

不甲斐ないことにインフルエンザにかかってしまいました（；／＼
、）

でも海斗だって高熱で殺し合いしてたし平気だよね♪

禁止区域の強者たち

side 修史

圧倒的だった。

ゴム弾だったとはいえ、身体に当たれば痛みはある。

なのに相手はそれでも俺に向かってくる。

銃は蹴り飛ばされどこかに飛んでいった。

銃声を聞きつけて来た設子もサバイバルナイフを両手に応戦したが蹴りでナイフは折れ、節子は蹴り飛ばされてしまった。

声をかけようとするが相手はそんなことさせないとの如く、俺に向かってくる。

一撃に殺気が籠っており、相手を殺すための攻撃だ。

俺も反撃するが簡単に回避される。

「ぐっ!!」

大きくでた攻撃を利用して投げ飛ばされる。

起き上がるうにも足で鳩尾辺りを押さえつけられて動きができない。

「あばよ」

相手の言葉と同時に拳が大きく振り上げられる。

ダメだ……逃げられない

確実に殺すために急所を狙い定めている。

（死ぬのか？）

そんなことが脳裏に浮かぶが次の光景でそれは消え去った。

雲に隠れた満月が顔を現し、襲撃者の顔が見えた。

蒼い髪に碧色の瞳、自分の目が狂っていないければ知っている顔だ。
間違いない、朝霧海斗だ。

Yシャツは返り血で赤く染まっている。

海斗のほうも俺の顔を見て動きを止めている。

「……修史……か？」

海斗は言う。

そして俺も海斗に言う。

「海斗………なのか？」

長く感じる沈黙が続く。

だが先に言葉を出したのは海斗だった。

「なんでお前がここにいる？」

海斗は変わらず目に敵意を抱いていた。

当然だろう。

禁止区域で知り合いがいたら誰もが言う言葉だ。

ここは全てを話したほうがいいか？

そのような考えが浮かぶ。

俺は考えていると飛ばされてた設子がこちらに向かってきた。

設子もこの光景にはさすがに啞然としていた。

「修史だけでもなく設子までもか……」

海斗は設子と俺を交互に見てため息を漏らす。

そして足の力を緩めた。

「今は口論してられねえからな。この事はここから出てからだ」

そう言い眠っている麗華の元へ行こうとしたが海斗は足を止めた。

「誰だ？ そこにいる奴は」

海斗が暗闇を睨む。

そして出てきたのは1人の女性とフードを被っている者が1人。

そしてフードを被った者の手にはぐったりとしている薄汚い男が引きずられていた。

「驚いたな、まさか気配を気づかれるとは思わなかった」

フードを被った者が海斗に言う。

声からして男だと分かる。

「気配を消しきれてなかったんだよ。あと視線もな」

海斗が淡々と言う。

その言葉に男は苦笑する。

「実にいい、お前を見ていたがかなりの実力があそうだ」

男は海斗に向かってゆっくりと近づいていく。

「今回は依頼者との待ち合わせで終わらすつもりだったが気分が変わった。お前を壊すことにしよう」

「オレを壊す？ やれるモンだったらやってみるよ」

海斗は怯みもしないで堂々としている。

「ちよつと……」

隣にいた女性が男になにか言っている。

長い金髪に蒼い瞳で設子にはすまないが結構な美人だ。

男は女性になにやら説得している。

短い説得だったが女性は折れたらしい。

好きにすればみたいに手で煽っていた

「待たせたな」

「別に待っていいえよ」

海斗は拳を鳴らしてすでに戦闘体勢だ。

「そうか、なら始めよう」

その言葉と同時に男が海斗に一気に近づく。

そして海斗の顔面に拳が当たった。

俺と設子は遠くで見ていたが攻撃が早くて反応が追いつかなかった。

「ほう、今のを防ぐか」

そして海斗は今の一撃を手の平でしっかりと止めていた。

「当たり前だ。誰が好き好んで野郎のパンチなんて喰らうかよ!!」

海斗が蹴りを放つがあつさりと回避された。そしてその後はひたすら接近戦の殴り合い。殴り合いと言つても2人は一度も殴られていない。すべて往なすか、受け止めるかの2択。

「やるな小僧」

「こっちは半分も出してないぜ」

息切れも起こさずにひたすら拳を突き出す。

それだけなのに全ての攻撃は殺しの一撃。

俺だったらすぐにやられそうな勢いだ。

男は手刀で海斗の急所を連打する。

海斗はそれを腕で受け止めている。

「本来ならば数撃当たれば骨が折れるはずなのだが……丈夫な骨だな」

「こちとら、骨の鍛え方が違うんでな……頑丈だぜ」

「ならばこれはどうだ？」

男が海斗の腕を掴む。

そしてゴキツ、と関節が外れる音がする。

「これで右腕は使えん」

海斗の腕は肩と肘の関節2つとも外されていた。だが本人は妙に落ち着いている。

「外れたならはめればいいことだ」

そう言い肩と肘の関節を無理矢理はめ直す。
さすがにこれは無茶苦茶だ。

「手荒い真似をする……」

男の方もこの行動には驚いているようだ。

「そろそろ少し本気を出すぞ」

海斗が肩を大きく回す。

そして男との距離を縮める。

「速い!!」

今までとは違い、動きが速く攻撃も鋭い。

「ちっ」

男の方も意標を突かれたのか海斗の動きを読みきれていない。

「おらよっ!!」

海斗の回し蹴りが男の顔面を襲う。

そしてフードが取れ男の顔が見えた。

黒い髪に黒い瞳。

年齢は20代後半くらい

そして目立つほどの額から頬にかけての傷があった。

「ふう、今のは効いたな……」

口内を切ったらしく口元の血を拭く。
だが男は笑っていた。

まるで強者に会えたのを喜んでいるかのように。

「なにやってんだか……」

男の頭に鉄パイプが当たる。

そして後ろにいたのは金髪の女性だった。

「もう時間よ、お遊びはここまで」

女性の言葉に男は力を抜く。

そして海斗を見た。

「悪いが今日はここまでだ」

「別にいいぜ、オレはもう喧嘩は面倒だ」

海斗の方も殺気を霧散させた。

そして男は海斗に背を向ける。

「またどこかであつたら壊し合おう」

「こっちはお断りだ」

それを最後に男と金髪の女性は暗闇の中に溶け込むように消えていった。

side 海斗

すごく疲れた。

あのおっさんの拳は受け止めても痛かった。

まあ、関節外されただけでよかったな。

折られたら直すのが面倒だからな。

「さて……」

服に付いた埃や固まった血などを払い落とす。

さつさと禁止区域から出ないと他の住人に襲われかねない。

「修史、ここから出るぞ」

麗華を抱えてオレは二階堂邸へ目指す。

禁止区域は庭みたいなものだ。

修史などよりも地形には詳しい。

「海斗、腕は平気なのか？」

さつきの戦闘で関節が外されたことを言っているらしい。

「別に平気だ。関節が外れるなんて何度も経験がある。直すのもこれが初めてじゃない」

そう言い返し足を進める。

時々、住人と鉢合わせになることがあったが全て蹴散らしていく。

「もうすぐだな」

徐々に遠くで明かりが見えてくる。

このまま行けば禁止区域に出られるだろう。

だが行く手に1人誰かがいた。

女だった。

長い薄い紫のような髪が腰まで伸びている。

「あら？　なんでこんなところに表の住人がいるの？　……でもいいわ、このイラつきをあんた達で解消しようかしら」

『表の住人』と言ったということはこの女も禁止区域の住人か。

しかもここまで会ってきた奴らとは一味違うようだ。

数メートル手前でオレは止まる。

そして抱えていた麗華を修史に渡す。

「海斗？」

「悪いな修史、どうもこの女は一味違うみたいだ。オレが囿になるから隙をみてこのまま真っ直ぐ行け。そうすれば出れるはずだ」

オレはそう言い一歩前に出た。

「あんたが最初の獲物？　すぐに死なないでよね」

「雑魚に殺されるわけないだろ、孕ますぞ」

オレの挑発で逆鱗に触れたみたいだ。

目にはオレを殺すことしか考えていないようだ。

「上等……じっくりいたぶってあげる」

ナイフを手にオレに向かってくる。

接近戦によほどの自信があるようだ。

ナイフを避けながら修史に視線を送る。

オレの視線を読み取り2人は出口へと走る。

「なによそ見してんのよ!!」

鋭い蹴りが横から来る。

咄嗟に腕でガードしたがジンジンと痛みがくる。

「よくそんな細い足でこれだけの威力が出るんだか……」

すらりとした足を見てオレは呟く。

掴んだらすぐに折れてしまいそうな細い足だ。

「私は最強なの、あんたなんかには負けはしないわ」

言動といい戦い方といいかなり上から目線だ。

こういう奴は大概負けを知らない奴が多い。

この女はまさにそのタイプだろう。

攻撃は鋭いがただそれだけ、避けられないわけではない。
ナイフや蹴りを避ける毎に女の顔が怒りに変わっていく。

「さっさと死ねえ!!!!」

叫びながらナイフを振り回す。

あまりの怒りのせいか攻撃が大振りになっている。

そろそろ終わらすかな……

「おら!!」

ナイフをかわして腹にパンチを一発、手加減なしに振りぬく。
女は軽く後ろに飛ぶが立っていた。

「この……!!!!」

「タフだな」

殴った際に反射的に後ろに下がってダメージを軽減したらしい。
禁止区域の住人が持つ生存本能のおかげだと言えよう。

攻撃を受けたことが自分の方が強いということかさらに殺気を撒き
散らす。

「殺す………殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す!!!!!!!!」
「!!」

目が軽く血走っており呪詛のように女は叫ぶ。

これ以上やっていたら本気で面倒だ。

この女には悪いがここらでさいならしよう。

幸いなのか女の声が集まってきた住人が所々にいる。

こいつらを利用しよう。

「おい!! この女は滅茶苦茶弱いぞ!! やるなら今だぜ!!」

その言葉で周りの住人が女を囲んでいく。

禁止区域で女の利用価値は全員が知っている。オレを相手にするよ
り女を相手にしたほうがよっぽどマシだろう。

ソロソロと闇の中から男達が出てくる。
目的は目の前の女、それだけ。

「よし、逃げるか」

オレはその場を去るように修史の後を追う。
後ろではなにやら女の怒りの声や男の叫び声が聞こえる。

「これだから禁止区域は……」

そう思い明かりがある方へ走っていった。

「アイツ……！！ アイツアイツアイツアイツ！！！！！！！！」

死体を何度も踏みつけながら怒りをぶちまける。

（あの男、今度会ったら絶対殺してやる！！！！ 拷問なんて生ぬるい！！ 生きていることを後悔させながらじわじわと鬦り殺してやる！！！！）

目には怒りの炎が業火のように燃えている。

「探したぞ舞。………これは一体なんの騒ぎだ？」

後ろには頬に傷がある男、相馬がいた。

「相馬……！！ 何の用よ！！！！」

未だに怒りが消しきれずに舞は相馬に叫ぶ。

「探していたと言った、それにしてもこれはお前がやったのか？」

周りにはおびただしい程の死体が転がっている。

海斗が集めた男達だ。

だが全員もう肉の塊だった。

「殺して何が悪いの！！」

「殺すなどは言わん。だが少しは自重しろ」

「だったら何？ あんたが相手になってくれるの？」

ナイフを手で回しながら相馬を睨む。

まさに一触即発な雰囲気だ。

「幹部同士の殺し合いは禁止されているだろう。お前の父が黙っていないぞ」

「……ちっ！！ 気分が乗らなくなったわ。今日はもう帰る……だけどね、次に邪魔をしたら殺すわよ！！」

「……………善処しよう」

相馬は無表情で舞に言う。

舞は住家に帰ろうとしたが足を止める。

そして街がある方を見た。

見つめる視線には憎悪が籠っている。

「……………どうした舞？ 向こう側を見たりして？」

相馬が舞に問いかける。

「別に……………ただ少しムカつく獲物がいただけよ」

それだけ言い、舞は暗闇の中に溶け込んでいった。

（舞が執着する程の人物か……………）

相馬は舞が見た方向を一瞬だけ見る。

そこには瓦礫と舞がやった死体だけがある。

（いずれまた出会うことがあるかも……………いや、考えすぎか）

そう割り切り舞と同じ闇の中に消えていった。

禁止区域の強者たち（後書き）

いかがだったでしょうか？

自分的にはイマイチかなと思っちゃてたりしています

感想や〇〇〇〇を出して！！などの意見もドシッドッシと書きちゃ
ってください。

出来る限り意見を反映させたいと思います。

ノ 明日は戦場のヴァルキュリア発売日だゝへ（^^へ）（ノ^^）
ノ

素性

S i d e 修史

俺と設子は走る。

先程目の前現れた長髪の女の子、普通じゃなかった。

あれが人のする眼なのか？

まるで視界に映る人間を人間とも思わない眼。

これが禁止区域なのか？

そして海斗はそんな状況を平然と……いやむしろ楽しんでいるようにも見えた。

麗華を俺に預けてたった一人で向かっていく。

何も知らない一般人から見れば喧嘩か何かに見えるだろう。

しかし海斗たちがすることは喧嘩ではない、正真正銘の殺し合いだ。勝者は生き、敗者は死ぬ。

自分にかかる重圧感は計り知れないだろう。

海斗が視線を送ってきたとき……俺は見ってしまった。

海斗が殺し合いの中で僅かに笑っているところを……

「なんとか……出られたわね」

設子は肩で息をつきながら言う。

俺たちが出た場所はネオンや看板の照明が光る通り、俗にいう水商売がある場所に建っている廃ビルだった。

どうやらこのこと禁止区域はかなり近い場所に隣接しているみたいだった。

「とりあえず本部に連絡を入れよう」

禁止区域の中では圏外だったため通信が出来なかったがここでは通信が出来る。

「こちらシールド9、本部応答願います」

「こちら本部、シールド9か？ 通信が来ないので心配したぞ。シールド10も一緒なのか？」

通信に出てきた課長は心配してくれた。
なんだか安心感が込み上げてくる。

「はい、シールド10も無事です。二階堂麗華も今はこちらで保護しています。薬が何かで眠っていますが特に目立った外傷などは見当たりません」

「了解した。至急お前たちがいる場所に救援の部隊を送る。部隊が来るまで警戒を怠るなよ」

「分かりました。課長、二階堂邸はどうなっていますか？」

長女がいなくなったとなれば搜索しているはずだ。

「今も搜索をしているがお前たちがターゲットを保護できた。こちらから佐竹に連絡をしておく、心配するな」

「そうですか」

「こちらも新しい情報を入手したが今はいいだろう。後日連絡をする通信は以上だ」

通信が切れて深く息を吐く。

自分は生きていると自分自身に言い聞かせる。

「海斗は大丈夫かしら……」

設子が自分たちが通ってきた道を振り返る。

壁に人がくぐれる程の穴が空いている。

その先は真っ暗で何も音がしない。

「大丈夫さ……海斗の実力を設子も味わっただろう？」

油断していたわけじゃない。

だが実力が違い過ぎた。

組み手をしていたときも海斗は攻撃を食らっても平然としていた。

（海斗……お前は一体何なんだ？）

未だに姿を現さないクラスメートの無事と疑惑を胸に時は過ぎていった。

本部に連絡をして一時間後、アイギスの救援部隊が到着した。

俺達は麗華を引き渡し手当てを受ける。
幸いにも海斗の蹴りを食らった設子だったがナイフでガードしていたおかげで打撲程度で済んでいた。
俺はかすり傷だけだ。

ガラッ

後ろにある禁止区域に繋がる穴から石が崩れる音がした。
そしてこちらに近づく足音。
傍にいたアイギスの隊員が銃を構える。
そして穴から出てきたのは……………海斗だった。

「ふう……………疲れたぜ。……………あ？」

海斗は俺達を見てなんだコイツらみたいな顔をしている。

「誰だお前は！！」

海斗を知らない隊員は銃口を海斗に向ける。

「待ってください！！彼は味方です」

俺は隊員の銃を掴んで説得する。

味方、麗華のボディガードなどと海斗に害はないことを言つと隊員は海斗に非礼を謝る。

海斗は『別にいい』といい隊員に言った。

「修史、麗華はどこにいった？」

海斗は麗華の安否を聞く。

麗華はちゃんとアイギスの隊員が佐竹校長と二階堂のボディーガードによって二階堂邸に送り届けた。

でも海斗には麗華を捜索していた屋敷の人に渡したと言う。あまり余計なことを言う必要はないだろう。

「そうか、ひとまずは安心かな」

それなりに疲れていたみたいだ。

海斗は腰を落として一息つく。

「それにしてもこの周りの人といい、お前たちといい……………何者だ？」

海斗が俺達を見る。

目を合わせただけで心を読まれている気分になる。

「ただのボディーガードだよ。この人たちは設子お嬢様の屋敷の人たちさ」

「修史……………嘘はよくないぜ」

海斗は笑う。

「人間は嘘を言うとき眼球が激しい動く。平常心を装っているみたいだが微かに動いていたぜ？」

付け入る隙がまるでない。

実力もあり頭も回る、本当にこれが成績最下位なのか？

『これはなかなか面白いものを見せてもらった』

突然課長の声が響く。

声が聞こえた方向には一人の隊員がノートパソコンを持っている。そして画面には課長が映っていた。

「アンタは？」

画面に映る課長を海斗が見る。

「私の名前は神崎恭一郎。修史の父親だ」

「神崎？ 如月じゃないのか？ しかも父親って割には似ていないな」

「まあ、それらは何とも言えない」

「それで？ 修史の父親が何の用だ」

「いきなりだな……まあいいだろう。単刀直入に言おう、我々が何者かは後日に確かめ合おうじゃないか」

「オレは今聞きたいんだが？」

「君の言い分もわかるが今はこんな時間だ。君も屋敷に戻らないと後々面倒になると思うんだか……」

「……………」

海斗は何やら考え込む。
そしてため息を吐いた。

「いいだろう……その提案に乗ってやるが忘れるなよ。破った場合は………分かるな？」

「怖いね〜まったく、心配なくていい。約束は必ず守る主義だ」

「わかった」

海斗は納得したらしく二階堂邸に戻ろうとする。

「海斗！！……禁止区域では助かったよ」

海斗の背中に向かって俺は言う。

海斗は足を止めずに手の平を振って行ってしまった。

Side 海斗

二階堂邸に帰ると尊が鬼気迫る勢いで俺に向かってきた。

どうやら麗華がさらわれた事でオレに文句を言っているようだ。

だがかなり錯乱状態のようで何を言っているかさっぱり分からない。

（この様子だと源蔵のオッサンの雷が落ちそうだな………いや、火山爆発の規模になるかも………ヤベーな）

嫌な汗が背筋に流れる。

オレは尊を押し飛ばして自分の部屋に行く。
後ろから怒鳴り声があるがそんなのは無視だ。
部屋に着いたオレはドアを閉め鍵をかける。
これで誰も入ってこられない……はず。

「まさかツキがいるとかないよな？」

オレはベッドの下やクローゼットの中など部屋中を調べる。

「いないな」

流石のツキもあれだけのことが起きた後なのでオレの部屋に入ることは出来なかったと見える。

「そうとわかればさっさと寝よう」

部屋の電気は点けっぱなしでベッドに入る。
緊張が徐々にほぐれていき眠気がくる。

「グッナイ、オレ」

そう言い俺が寝ようとした瞬間、いきなり電気が消えた。

「！！？？」

オレは一気に意識が覚醒した。
そしてドアの方を見るとアイツはいた。

「いたずら成功」

ボタンを押しているツキがにやけた顔でこっちを見ている。
だが眼には若干の怒りが見える。

「なんで入ってきてんだよ！！ 鍵をかけたはずだ」

「チャラララッララッ」 ツキちゃんフフフツ道具「マスターキー」
。油断したな海斗」

この変態メイドが！！

「今夜はこの辺で勘弁してあげます」

「まだなんかあんのかよ……………」

「ええ、まだタップリと………… フッフ」

そう言い残しツキが音も無く出て行った。
ドアの外を再度確認してツキがいなくなったことがわかったとオレは
今度こそ浅い眠りへと落ちていった。

「……………」

朝日でオレは目を覚ます。

時間は6時、今日は日曜日で学校が休みだ。
身体を起こしてスーツに着替える。

昨日の戦闘での疲労は睡眠によって回復したみたいだ。

「腹が減ったが……」

食堂に行こうするが足をとめる。

昨日のことでなにやら屋敷の使用人から視線を感じるかもしれない。使用人の視線は別にいいとして問題なのは源蔵のオッサンだ。もし源蔵のオッサンに会ったらアウトだ。

「食堂に行くまで源蔵のオッサンと会わずに移動せよ!!」

海斗ミッションスタートだぜ!!

静かにドアを開けて辺りを窺う。

幸いにも誰一人いない。

オレは足音を立てずに食堂へ向かう。

「抜き足、差し足、忍び足ってか」

こそこそと廊下を進む。

すると前方の曲がり角から声がする。

「やべっ」

オレは廊下に置いてあった植物の陰に隠れて気配を消す。通り過ぎたのは2人のメイドだった。

しかも話しているのが昨日の件だ。

「やっぱり麗華のことは知れ渡っているな」

そうとわかれば善は急げだ。

オレは食堂へと急ぐ。

その後はうまく使用人に見つからずに食堂へと距離を縮める。

「よし、この角を曲がれば食堂だぜ」

オレは静かに食堂に行こうとしたが前方の角から魔王が出てきた。

「ん？」

「……………」

魔王と目が合ってしまった。
どうする？

？たたかう

？にげる

？殺す

いや、最後のはダメだろうな。

これは逃げたほうがいいだろう。

オレは回れ右するとそこには佐竹がいた。

逃げ道が無くなった。

「何をしている海斗」

オレを見た佐竹は素っ気なく言う。

「いや別に。ミッション失敗だと思ったただけだ」

佐竹はわけが分からないといった様子だ。

一方の魔王はオレを睨みつけている。

肝がちっさい奴は見ただけで即死レベルだな。

「……小僧」

「あ？」

小僧と呼ばれオレは魔王を見る。

一瞬眉毛がピクリと動いたが気にしない。

「……………ンンッ!!」

なにやら咳払いみたいなことをするとオレの横を通り過ぎて行ってしまった。

「なんだあれ？」

オレは傍にいた佐竹に聞いてみる。

「さあな、それより海斗お前に手紙だ。あとで読んでおけ」

それだけ言つて佐竹も同じくどこかに行つてしまった。

オレは手紙をポケットに入れ食堂に入つて行つた。

メシには変なものは入っていないがやはり視線は感じる。
オレは視線を無視して朝飯をさつさと食つた。

「食った食った」

食堂で腹が満たされたオレはのんびりと庭のベンチでくつろいでいる。

ポカポカと暖かく寝ちまいそんな気分だ。

「そういえば佐竹からの手紙があったな」

ポケットに入れていた手紙を取り出す。

「差出人の名前は……なしか。誰からだ？」

封筒を破り中身を確認する。

そこには短い文章だけが書いてあった。

『君が知りたかった事を教えよう。商店街のデパート前で待つ』

「ふーん、回りくどい真似をするな。お望み通り行ってやろうじゃないか」

本来、麗華に出かけることを言わなければいけないが、今日は部屋で大人しくするように言われているらしい。

今日くらいは言わなくても平気だろう。

オレは立ち上がり手紙に書いてあったところに向かった。

「この辺りか？」

手紙の指示通りにオレは商店街のデパートに着く。
休日なので平日よりも人の数が多い。
これでは簡単には見つからない。

「どこにいるんだ？………あれか？」

人混みの中にいる黒いスーツに黒いサングラスをかけた男がデパートの壁にいた。

オレは黒いスーツを着た男に近づく。
相手もオレの接近に気付いたようだ。

「あんたがこの手紙の差出人か？」

オレが手紙を取り出し男に見せる。

「この手紙を持っているということは君が朝霧海斗で間違いないな？」

「当たり前だ、誰が手紙だけでここまで来るかよ」

「……いいだろう、ついてきたまえ」

男は歩きだす。

オレは黙って男の後を追う。

目の前の男だがオレより少し背が高い。
そしてがっちりとした体つきをしている。

体格から見ればレスリング辺りか。

「着いたぞ」

男がそう言つと目の前にあるのはマンション。

「9階の010だ」

それだけ言つて男は去つていった。

「あとは1人で行けつてか、仕方ねえ」

オレはマンションに入る。

あちこちに防犯カメラが設置してありセキュリティの高さが伺える。

「9階の010だよな」

ボタンを押していきインターホンが鳴る。

「どうぞ」

女の声が聞こえると同時にドアが開く。

「さて蛇がでるか、鬼がでるか」

少しワクワクしながらエレベーターで9階へ上った。

「ここだな」

目的の部屋に着き、ドアを叩く。

そして足音が聞こえカギが開く音が聞こえてドアが開く。

「やっときたか」

出てきたのは設子だが雰囲気と言葉遣いが違った。

「お前誰？」

「真田設子以外に誰に見える。お前の目は節穴か？」

そう言つて奥に行つてしまった。

（学園とはえらく態度が違うな）

そう思いながらもオレは靴を脱いで部屋に入る。

奥には修史と設子、あと画面には昨日のオッサンが映っていた。

『待つていたよ、まあ座りたまえ』

オレは少し距離を空けて座る。

「で、聞かせてくれんだろう？」

オレは画面に向かって話す。

『そうだな、君には小細工は効かないみたいだし早く言っ
てしまおう』

神崎そう言い咳払いをする。

『改めて挨拶しよう、私は神崎恭一郎。ある会社で修史と設子の上
司をしている。そして今回は君のプリンシパル、二階堂麗華の護衛
という任務で修史と設子に任命した。大雑把に言えばこんな感じだ』

「なるほど」

オレは神崎の言葉を聞く。

これで修史と設子の身体能力の高さが納得できた。

『今後とも二階堂麗華の護衛を続けるが君には今まで通りの生活で
構わない。だがこの事は他人に口外しないでくれ』

「いいぜ。話からするとどうせ佐竹も一枚噛んでいるんだろう」

佐竹の名前が出ると修史の身体が僅かに揺らぐ。
今の修史の反応でオレは確信した。

『さすがアイツの息子といったところか』

「なに？」

今聞き捨てなら無いことを言った。

『アイツの息子』だと？

『修史に設子、少し彼と2人きりで話をさせてくれ』

修史と設子は黙って部屋から出て行く。
残ったのはオレと画面に映る神崎だけ。

『さてやつと2人きりになったな。……雅樹は元気か?』

「アンタは親父を知っているのか?」

親父の名前を出されてオレは画面に映る神崎を殺気混じりの眼で見る。

『そう警戒するな。この事は他言無用だ、心配するな』

そう言われオレは殺気を霧散させる。

「アンタと親父の関係はなんだ」

『私と雅樹の関係か……強いて言うなら同級生』だった』だ』

「同級生だった?」

意味ありげな事を言う神崎。

『少し昔話をしよう、私が雅樹と会った過去の話だ』

オレは神崎の話を聞いた。

『もう何十年も前の話だ。

私の家庭は日本全国を転々とする身だった。

そして私は君が通っている憐桜学園に転入した。

そこで会ったのがお前の父親の雅樹だ。

彼は当時凄かったよ。

成績優秀で運動神経抜群、そして人望に厚い。

まさに優等生といった感じだった。

私も思ったよ、彼は将来有望なボディーガードになると思った。

何度も組み手では完敗してはお互いに仲を深めていった。

だが私は先ほど言った通り全国を転々とする身だ、すぐに別れが訪れた。

しかし去る際に彼は私に言ったよ。

『お互いにボディーガードを目指そう』と。』

「それでアンタは？」

『その後は私はガーディアンとして人を護る仕事に就いた。

まあ海外で傭兵生活をしている時期も長かったがな。

そして日本に久しぶりに帰ってきた時に雅樹に会おうと思った。

だが雅樹の居場所が分からなかった。

憐桜学園の責任者であるジジイ……もとい佃吾郎に雅樹の場所を聞

いたが佃吾郎は雅樹については話してはならんと言われた。

それでも私は雅樹について調べた。

調べていくにつれて妙な噂も流れてきた。

雅樹がボディーガードがしてはいけない事をしたという噂だった。

それで気づいてしまったんだよ、雅樹がした事を』

「……………」

『それから今に至り、君を知ったんだよ朝霧海斗君。君は若い頃の雅樹に似ている。それが嬉しくてね』

（また親父と似ているか、吐き気がするぜ）

『以上が私のつまらない昔話だ。悪いな変な事に付き合ってしまった』

「別にいい」

「そうか、それじゃあもう一度聞きたい。雅樹は元気か？」

「親父は……元気すぎて困っているくらいだ」

オレは嘘を吐く。

神崎はそうかと呟く。

『これで海斗君の聞きたいことは無いかな？』

「いや、あと1つある」

『なにかな？』

「今回のような事は今後とも起きるのか？」

『……………』

オレの質問に神崎は黙る。

「それは肯定として受け取っていいのか？」

『こちらとしてはなんとも言えない』

「そうか、それだけでも十分だ」

オレは立ち上がり部屋から出て行く。

部屋の外には修史たちがいた。

「じゃあな修史、また明日」

それだけ言っただけでオレは二階堂邸に戻った。

side 修史

海斗が帰った後、俺と設子は部屋に戻り課長に聞く

「課長、海斗の事を知っていたんですか？」

『ん？ まあ古い馴染みに似ていたからな。先ほど話してハッキリとわかった』

「ではなぜ海斗はあれほどまで強いにも関わらず成績が悪いんですか？」

『お前も知っているだろう？ 能ある鷹は爪を隠すって言うし海斗君も目立ちたくはなかったのさ』

「そんなもんですか？」

『そんなもんだ、まだ修史には早いかな』

なんだか子ども扱いされている感じがした。

『さて海斗君のことに關してはここまでだ。昨夜報告出来なかったことを言うぞ。しっかりと聞いてくれ』

課長は話を変えて進める。

『前に言った二階堂などの令嬢を暗殺しようとする組織だがあれはごく少人数の人間が集まる組織だと分かった』

「少数ですか？」

『そうだ。少数だといっても精鋭部隊だと思ってくれて構わない。そしてその組織は他の組織の仲介役としても機能しているらしい』

「仲介役ですか」

『依頼者が『embrace of Death』に、そして別の組織へと依頼を回していく。』

そうする事で依頼者の素性をこちらからは判らないようにするためだ。そしてここからが本題だ』

課長が言葉を区切る。

『今回の組織は設子がいた組織「ファランクス」も関与している事がわかった』

ファランクスの言葉に設子は激しく動揺する。

『前にお前達が捕まえた男はどうか今回の護衛者、修史と設子の観察が目的だった可能性がある。男の方もファランクスとは無関係だったとは言いにくい』

「では今回の相手はまたファランクスということですか？」

『そうだ、特に設子はファランクスの連中から積極的に狙われる可能性のある。十分に注意してくれ』

「了解……しました」

設子は弱弱しく答える。

『それでは報告は以上だ』

通信が切れて静寂になる。

設子を見ると難しい表情をしていた。

「大丈夫、設子？」

「少し動揺しただけ、問題ないわ」

そう言っているが笑顔がぎこちない。

「大丈夫、2人合わせてやれば何とかなるよ」

設子の肩を優しく寄せて言う。

設子は少し恥ずかしがったがその後は俺の肩に寄り添ってきた。

「そうね修史とならんでも出来るわ」

「そうさ、俺たちは一心同体なんだから」

そう言いお互いの絆をより深めていった。

索性（後書き）

課長の過去をこんな感じにしてみました。

どうだったでしょうか？

次回は海斗たちの日常？をテーマにして書こうと思います
ではまた次回（＾－＾）ノシ

特別な昼食

side 修史

朝日でまどろみから目を覚ます。

「はあ、もう朝か」

ゆっくりと自分の身体を起こす。

昨日の海斗たちとの会話がまだ頭に残っている。

「お弁当作らなくちゃ……」

ベッドから出ようとするが腕を引っ張られる。
引っ張られた腕を見るとそこには設子がいた。

（ああ、そうか）

次第に昨日の記憶が鮮明に思い出す。

昨日は設子と一緒に寝たんだっとな。

言っておくがた・だ・の『添い寝』だからな！！

「すう……すう……」

設子はリズムのよい寝息をたてているが俺の袖をがっちりと掴んでいる。

指を解こうとするが中々できない。

「どうしよう、これじゃあ弁当が作れない」

もう力ずくで振り解くか？

そう思ったが設子がポツリと『修史』と言う。

設子を見るが起きてはいない。

寝言か？ 設子の珍しい一面が見れた気がした。

「しょうがないか、今回はこのままにしておこう」

俺は再びベッドに入る。

そして設子が起きるまで設子の顔を見ていた。

隣桜学園へ昼休みへ

今朝から時間が経ちもう昼休み。

設子の寝顔を見ていたおかげでお弁当を作る時間がなかった。

「修史、お弁当は？」

今朝のことを全く覚えていない設子はお腹が減ったらしくお弁当を要求してくる。

「ごめん設子、今日はお弁当ないんだ」

「え！？ それじゃあ昼食は！？」

「どうしよつか……な？」

冗談交じりに言おうとしたが目の前には腹を空かした鬼がいた。
このままでは俺が喰われてしまう！！

「どうしたの？ さっきから周りにダダ漏れよ」

俺たちの会話を聞いていた麗華がこちらに来る。

その麗華の後ろにはダルそうにしている海斗がいた。

一瞬海斗と視線が交わるが海斗は昨日のことは気にしていない様子だった。

「麗華さん聞いてください！！ 修史ったらお弁当を忘れたんですよ！！」

真剣な顔で設子が麗華を見る。

設子の気迫に麗華も少し驚いていた。

「お弁当がない？ それなら学園の食堂を使えばいいじゃない」

麗華が至極当然なことを言う。

たしかにこの学園には食堂がある。

だが食べるためのお金がない。

別に無一文ではない、ただ値段が破格なのだ。

「使いたいのは山々なんですけどまだ料金を支払っていないので使えないんです」

俺は麗華にそれっぽい事を言う。
もちろんこれも嘘だ。

もし食堂の料金なんて払ったら俺の給料なんて一瞬で飛んでいく。
だから毎日お弁当を作っているわけだ。

「そうなの……それじゃあ今回は私が貴方達に昼食をご馳走するわ」

「「え!?!」」

麗華の申し出に耳を疑った。

昼食を奢る? 一食何十万もする昼食を?

「いいんですか!?!」

「別にご馳走するくらい平気よ」

当然のように麗華は言う。

なんだか麗華から後光が見えますよ。

「明日は台風か?」

海斗は外を見て呟いていた。

side 海斗

麗華の計らいで修史たちとメシを食うことになったわけだが……

「なんでお前たちまでいる？」

隣に座っている尊を見る。

「何のことだ海斗？ 偶々食堂で会って一緒に食事をする事になっただけじゃないか」

そう言いつつ麗華のことをチラチラと見ていやがる。
尊の行動パターンは麗華がいるとほぼ同じだ。

「おい、尊」

「何だ？ 僕は今とても忙しい」

「じゃあ麗華の隣に座りたくないんだな、わかった」

「待て海斗、話を聞こうじゃないか」

がっちりと肩を置き……いや、握りつぶさんといった感じでこちらを向く。

はつきり言っただけかなりキモイ。

「今晚の夕食と引き換えに麗華の隣を座っていいぞ」

「今晚の夕食……ステーキとだど！？」

そう、今晚の二階堂邸の夕食はサーロインステーキ。

尊の好物であり、オレの好物でもある。

「貴様……卑怯だぞ!!」

「なら取引はなしだ」

「まてっ!! ……半分だ」

「喧嘩売ってんのか？」

「……4 / 5で」

「さいなら」

「…分かった、全てやる」

「毎度あり」

遂に尊が崩れた。

今晚は豪勢な夕食になりそうだ。

「ほらそこ、早く席に座りなさい」

麗華の声で尊が復活する。

現金なヤツだ。

麗華、尊、オレ、彩、修史そして設子の順でテーブルに座る。

麗華は尊が隣で嫌がっていたが、まあどうにかなるだろう。

「それで皆は何にするの？」

「それじゃあ私はグラタンで」

グラタンを注文する彩

「僕はたらこスパゲッティで」

スパゲッティを注文する尊

「そ、それじゃあ私はこれで！」

メニューを指差して注文する設子
ちなみに選んだのはトマト煮パスタ。

「私はいつもので」

ウェイトレスにいつものと言う麗華
同じのばっか食っているから身体が成長しねえんだよ。

「なによ」

視線に気づいた麗華がオレを睨む。
相変わらず勘が鋭い。

「海斗さんは何にするんですか？」

隣にいた彩がメニューを広げて聞いてくる。
メニューを見るが何が何やらさっぱり分かん。

「オレのはなんでもいいや。麗華、お前決めてくれ」

オレは注文をパス

「最後は俺ですか……」

修史がメニューを端から端まで見て悩んでいる。
見た限り時間が掛かりそうだ。

「あれ？ あの麗華お嬢様、この一番下にある『？？？』ってなんですか？」

一番下に書いてある謎の料理について修史が麗華に聞いていた。
聞かれた麗華はなぜか青い顔をしている。
麗華だけではなく尊や彩まで青い顔をしている。

「このメニューだけは絶対ダメよ」

麗華が修史に言う。

「何ですか？ まさかとっても高額で食べられないとかですか？」

修史は謎のメニューに興味津々の様子だ。
すると麗華がオレをちらりと見る。

「それなら修史君、海斗にそれを食べさせるからもし食べたかったら海斗に貰いなさい」

「おい麗華、なんだそりゃ」

「アンタは黙ってなさい」

麗華に怒鳴られオレは黙る。

「それでいい？」

「俺はそれでもいいですけど……」

修史は首を傾げながら納得する。

「それじゃあ注文をお願い」

ウェイトレスが注文を受け取り厨房に向かおうとする時にオレを見る。

その眼はなぜか哀れみに満ちた視線だった。

「尊、なんだ今のは？」

「さあ、知らんな」

尊が答えるが目線を合わせようとしない。
実に怪しい＋不気味だった。

数分が経ち次々と料理が運ばれてくる。

本来、全部来てから一緒に食べるはずが麗華たちは即座に食べ始める。

オレのはまだ来てないのになんて薄情者どもだ。

「麗華、オレのまだかよ」

「もうすぐじゃ……来たわよ、海斗」

店員に運ばれてきた皿。

それがドームカバーによって料理が隠されていた。

「って、これってまさか!!」

ドームカバーで嫌な記憶が蘇る。

「なんか豪華そうですね」

事情の知らない修史は不思議そうにドームカバーを見つめる。
皿を置く店員の手は震えている。

「おい、これはまたか？」

店員に聞こうとするが言葉を発しない。

しかも去る寸前に十字を切っていきやがった。

「麗華、嵌めやがったな」

「何のことかしら？」

麗華は楽しそうに鼻歌をしている。

「麗華さん、これは一体？」

設子が目の前にある謎めいた料理を見る。

「これはね……ゲテモノ料理よ」

「「ゲ、ゲテモノ料理!？」」

修史と設子が驚きの声を上げる。

まあ、それが普通の反応だよな。

「そう、あつちで手を振っているのが憐桜学園料理長よ」

麗華が指差した厨房で料理長がいた。

「……こつち見て舌なめずりしながら包丁研いでるぞ」

つか、前回に増して凄まじい気配を纏ってやがるあのジジイ。

「フタ取りなさいよ、海斗」

「……………」

目の前のドームカバーを見る。

前回のあの料理を思い出しそうで嫌な汗が背筋に流れる。

だが、オレの好奇心が騒いでしょうがない。

これでもネズミやら。やら、拳句の果てには地球外生物の肉を喰ってしまったオレだ。

これ以上のゲテモノを喰った者は少なからう。

ぜひ今回も味あわせてもらおうじゃないか。

パンドラのフタに手をかける。

グッ。

「!?!」

フタをとろうとするが前回より下に押さえつける力が働いているようない感じがした。

「どうしたのよ海斗、早く取りなさい」

麗華が恐る恐る言ってくる。

オレは一旦フタから手を離す。

「海斗、すごい汗だよ」

「大丈夫だ修史。麗華、今回は前回よりもヤバイ気がする」

「アンタ…前回何食べたと思ってるの?」

「珍味な肉?」

「エイリアンの肉を食べたでしょうが!!」

エイリアンを喰った事を聞いて修史がオレを見る。
なんだか視線が痛い。

「それじゃあ、今回も2人で開けるか? 1人じゃさすがに無理そうだ」

「べ、別にいいわよ」

そしてオレと麗華がフタを持ち上げようとするが中々上がらない。

「おい、麗華」

「し、仕方ないじゃない。上がらないんだから」

どうやら今回ののはかなりの強敵らしい。
他にも助けが必要だな。

「修史手伝え」

「俺!？」

「当たり前だ、ここまで来たら一蓮托生だ」

今度は3人でフタに手を乗せるがそこにもう1人の手が乗る。

「修史、私も手伝うわ」

設子もフタに手を乗せる。
これならいけるはずだ。

「いくぞ……3、2、1……!」

4人で意を決し、フタを持ち上げた。

「こ、これは……!？」

「また……なにかの肉みたいね……」

「また……この嫌な臭い……」

「ぐっ意識を保たなければ……!!」

「これがエイリアンの……肉？」

「なんか茶色で血管が浮き出ているわね……」

目の前の料理を見て各々が感想を言う。

「今回ののは一体……」

「前回、貴方がエイリアンの肉を食べた後のことです」

「うお、またいきなり過去を話し出したぞ」

オレの後ろで料理長が不気味な顔で立っていた。

「貴方が食べたゲテモノ料理では私はあまり満足できずに、また各国を放浪しました」

ヨーロッパを中心に南アメリカのアマゾンから北極南極、

ゲテモノ好きの貴族にまで満足させるゲテモノ料理を 探し求めました。

時には貴族の機嫌を悪くし、指名手配される惨事になったこともしばしば」

「お尋ね者がよっ!」

「追っ手からの攻撃によって怪我を負い、怪我を治療してくれた女性と恋に落ちることも、しばしば」

「アンタどんだけモテんだよ！」

「とにかく、前回の料理を凌駕するゲテモノ料理の研究に明け暮れたものです」

「その歳で頑張っていたのね……」

「しかしながら、どの料理の前回の料理を超えることができないと感じておりました。

そんな私が北極の氷原を横断していると突然足場が崩れたんです」

「いきなり死亡フラグだな」

「私は咄嗟に氷の壁にピッケルを打ち付け落下しないようにしました。

しかし私はそのまま落下してしまいました。

目を覚ますと幸いにも怪我はありませんでしたが私は見てしまいました。

氷漬けにされている謎の生物を……」

「氷漬けの……生物？」

「私はその未知なる生物に心を奪われ、食べてみたいという衝動に駆られました。

その生物は大きく、氷漬けになっていたため全身を持って帰るのは困難だと感じたため、

氷漬けになっていなかった尻尾の部分を切断し持ち帰りました。

それが……これです。

あの日から今日調理するまで冷凍保存によりずっと保存しており

ました」

「つ、つまりあれか？　これは昔の動物の肉か？」

「いえ、あれから私は目にした生物が何か調べていましたが、私が見た生物と一致する過去の生物はいませんでした。

私の推察からすればこれはおそらく地底人の肉かも知れません」

「ち、地底人！？」

「はい、おそらくですが……」

「おそらくもなにも……」

信じられないと言うのが正直なところだが……。
禍々しいオーラを放っているところを見るとあながち間違っていないのかもしれない。

「食べてみなさいよ」

麗華がオレに死刑宣告してくる。

「簡単にいうなよ、今回は本当にヤバイだろ……」

「なに言ってるの、エイリアン食べたんだから平気でしょ」

「……………」

おそろおそろフォークを手を持つ。

「再びの経験か……今度は平気だといいな」

前回は地球外生物の肉を喰ったが今回は地球内だ、多少は大丈夫だろう。

果たして、エイリアンと地底人の肉を食べた人間など、この世にオレ1人だけじゃないだろうか。

フォークで肉を突き刺す。

感触は牛肉に似ているが中は妙にブヨブヨしている。

「いざ……」

口元に近づけると、なんとも言えないような匂いがする。前回のエイリアンとはまた違った匂いだ。かといっても食欲を誘うものではない。

「ま、また無理しちゃダメですよ。

不味かったら吐き出してください、海斗さん」

彩に励まさせるがあんまり嬉しくない。

なんでまた、オレがこんなメニュー食べることになってんだ？ そう思いながらも、口の中に肉を放り込んだ。

「もぐ……」

「これが朝霧海斗が食べた最後の食事だった」

隣で尊がなにか呟いていた。

「ん？ 意外と普通……？」

「また普通？ …… まあ、エイリアンの肉食べて今度は地底人の肉……。」
ホントにアンタ人間かしら？」

「ああ。別にどう——」

「……………」

一口食べ終わった瞬間に目の前が歪んで、猛烈な吐き気が襲う。
今回もどうやらハズレだった……らし……い。

side out

「か、固まっちゃいました……ね……」

彩が海斗を見て言う。

「主よ、この者に救いの手を差し上げますように。アーメン」

料理長は海斗に十字を切って早々と立ち去った。
修史と設子は海斗と地底人の肉を交互に見る。

「ねえ、食べてみる？」

麗華が修史たちに肉を勧める。

修史と設子はお互いに顔を見合わせ一言。

「「絶つつつ対にいきません!!!!!!!!!!」」

そして麗華たちにとっては2度目の、修史たちには初めてのゲテモノ料理の食事が幕を閉じた。

余談だが海斗はその後体調を崩して早退して二階堂邸で休養、その翌日で全快したという。

医師の診断では本来ならありえないと言っていた。

麗華も驚愕していたが海斗が抗体が出来たんだよと冗談交じりで言っていたらしい

特別な昼食（後書き）

いかがだったでしょうか？

海斗はエイリアンだけではなく地底人の肉まで食べてしまいました。

もはや人間じゃなくなってきたてますね（笑）

次回もこのような感じで行きたいと思います。

では（＾－＾）ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0522p/>

それぞれの楯と交差する思い

2011年2月20日05時19分発行